

「英文学」・英語文学の特質と成長

大田 信良*

英語学・英米文学・文化研究分野

(2016年8月26日受理)

要 旨

本論は主として「英文学」の特質について論じる。具体的には、英語文学・「英文学」における成長の表象・イメージを、理論的に、取り上げ、必ずしもこれらの分野・領域に限らず多種多様に生産されてきた成長の問題との相互規定的な関係性を論じる。川本静子『イギリス教養小説の系譜』のような旧来の教養小説論とそこで範例としてあげられたいくつかの代表的な文学テキストを取り上げ、「英文学」の特質が、階級の問題と切り離しがたいこと、その階級関係においてジェントルマンの表象・イメージによって解釈することができることを論じる。ジェントルマンを産み出す階層としてのジェントリは、下流あるいは下層階級と階級的に差異化されるだけでなく、中間層として、上流階級への社会流動性・階級上昇の欲望とダイナミズムを歴史的に具現する存在、貴族とともに上流階級＝「地主貴族層」を構成するものであったと旧来のイギリス史研究は論じてきたが、「英文学」の研究・教育は、これを、近代国民国家の時空間におけるジェントリという表象、すなわち、孤児のように社会的出自が明確でない存在から都会に出てジェントルマンへと階級の階段を上る成長の物語によって、そして、地域社会の立派な名士・名望家として「地主貴族層」に合体し取り込まれる物語によって、クラスルームその他において提示してきた。

と同時に、こうした試みは、それが実際に提示されるのがたとえば「英文学」あるいは英語文学の特質を主題や到達目標とするクラスルームをふまえてのことになるので、本論の実践は文学批評を中心として社会的編制・歴史的形成されたリベラル・エデュケーションという教育空間とその変容の考察を含むものともなる。つまり、「英文学」の研究・教育の旧来の範例的なテキストとしての川本静子『イギリス教養小説の系譜』を、旧来のイギリス史研究とともに、批判的読み直しの対象として取り上げ実践したメタコメンタリーは、川本の英国教養小説論の主人公の成長物語と旧来の歴史研究が提示するジェントルマンの表象との間に、解消しきれない齟齬があることを示し、これまでの「英文学」の特質についての研究・教育が、政治的・経済的な歴史を含む総合的なものではなく、きわめて倫理的・道徳的なものであり、そのイデオロギー的に脱政治化された限定的な理解や教えが、実のところ、「アメリカの影」によって規定されていたと解釈できることを論じる。このように、20世紀の第2次大戦後とりわけ冷戦期に顕著だった日本の「英文学」は、米国の冷戦イデオロギーによって歴史化することができる。また別の言い方をすれば、川本の英国教養小説論は、モダニズム小説にみられる詩的言語の純粋性の特権化を前提としたうえで、あらためて、19世紀あるいはヴィクトリア朝英国の小説の特徴を掘り起し、「制度化されたモダニズム」に沿ったかたちで「英文学」の歴史とりわけ教養小説の系譜を作成・形成しようとしたものでもあった。

そしてまた、このような議論をふまえたうえで、本論は、「英文学」の変容とそのひとつの形式としての英語文学の特質についても論じる。その際、英語文学の特質ならびにそれを含む新たなイングリッシュ・スタディーズをこれまで社会的編制・歴史的形成されたリベラル・エデュケーションという教育空間の変容において考察するためにも、現代グローバル資本主義世界における成長の問題を、1948年に国連で採択された世界

* 東京学芸大学 外国語・外国文化研究講座 英語学・英米文学・文化研究分野 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

人権宣言のレトリックを分析・解釈することにより考察したジョゼフ・R・スローターの研究ならびにそこで例示されている物語を取り上げる。旧来の教養小説の存続と第3世界文学やポストコロニアリズム小説への変容が、考察対象として選択されているが、その研究においては、新たに変容した教養小説における成長の物語つまり人間性を平等に認められた人間存在に到達するプロットが、なによりも各個人の教育的あるいは教訓的物語として解釈される。本論は、その場合の個人が、単に受動的に社会化つまり社会の規範にそって主体化されるだけではなく、自分ですでに知っていると思定されるものを気づきや再認のステップを踏みながら能動的に学ぶものとされることの、肯定的と同時に否定的な意味・価値を、スローターとともに確認し、戦後日本における「英文学」やイギリス史研究の分野・領域とは別の種類の成長の問題へと議論を接続・拡張する。そして、本論では、最終的に、ナショナルな時空間という枠組みとも、あるいは、米国リベラリズムの近代化という普遍主義やグローバリゼーションに対応するコスモポリタニズムが前提としてしまっている通時的・共時的思考とも異なるような、成長の問題についてのあらたなメタ共時的な語り直しが、「シンギュラー・モダニティ」と「オルタナティヴ・モダニティズ」との間のアンチノミーとしてあらわれ不毛な議論に終始しがちな問題を、生産的に解決する可能性があることが示唆される。

キーワード：英文学，英語文学，成長，グローバリゼーション，冷戦

1. グローバリゼーション時代以降の「英文学」あるいは英語文学？

かつて21世紀現在の「英文学」について、たとえば、「英米文学概論」といった大学の授業が実際におこなわれるクラスルームで取り上げる主としてイギリスの文学や英語で書かれて流通している作品といったもの、さらにまた、学会でのシンポジウムや発表や個人あるいは共著といったかたちで発表される論文執筆のような研究といったもの、等々を、具体的に思い浮かべながら、グローバリゼーション時代以降の「英文学」について考察を、行ったことがある。それは、2015年のイギリス文学を年末に回顧するという書評という形式で、いくつかの研究書や論集、ならびに、それに関連するかならずしもその年に発表されたものではない「英文学」あるいは英語文学に関する議論を展開した研究テキストを取り上げて、発表したものののだが、以下のような論旨のものであった。¹

われわれの思考・想像力を経済の問題にのみ限定することがもはやできないどころかむしろそのように限定することが有害ですらあるようなグローバリゼーションのさまざまなレベルでのダイナミックな運動や変容により、政治・国家あるいはナショナルな文学・文化はもちろん、戦争の形式・形態すらもが、かつての国民国家間の対立といった理解を超えるように、すっかり多様化・断片化してしまい、兵士の労働・雇用、戦場となる空間やテクノロジーの転換、ロジスティックスや経済・金融面の供給・流通といったマテリアルな基盤・条件をも考慮の対象にすることが、必要となってきたようだ。たとえば、『戦争・文学・表象——試される英語圏作家たち』福田敬子・伊達直之・麻生えりか編（音羽書房鶴見書店）のように、英語圏の作家たちを基本的には取り上げながらも、戦争とその歴史・文化を、各種の辞典や百科事典そして有名無名の伝記等からはじめて、その対象範囲も、ヨーロッパおよびその周辺のみ限定することなくグローバルに、そしてまた、ポピュラー・カルチャーや映像テキストにも注目して児童文学や少年・少女向けの文化にも手を伸ばすことを今後さらにめざそうとしているものがある。そしてまた、『ブラック・モダニズム——間大陸的黒人文化表象におけるモダニティの生成と歴史化をめぐって』吉澤英樹編（未知谷）のように、20世紀初頭に登場した「黒人性」という概念、そして、21世紀の現在から注意深く批判的に振り返るなら否定的な植民地支配やそれに対する闘争・紛争と同時に積極的な意味も付与され歴史化へと向かった黒人文化表象を取り上げ、そのさまざまな表象の形式・存在様態を、「かつてないもの」を集合的な言説の下に分節していくモダニズムという視点から、解明する試みも、なされている。個人作家の論集である『21世紀のD・H・ロレンス』日本ロレンス協会編（国書刊行会）の各論考を通底する主題も、編者「まえがき」によれば、「グローバル化」と「近代」あるいはモダニティ、とされている。

あるいはまた、英米の文学——あるいは、ヨーロッパとその植民地の文化の場合もありうるが——だけでな

く、これらの大英帝国・冷戦期アメリカやその英語文学・政治文化との関係性において捉え直される日本とその表象を取り上げる研究も、少なからず、目にするようになってきている。2014年にも、『日本表象の地政学——海洋・原爆・冷戦・ポップカルチャー』遠藤不比人編（彩流社）や『冷戦とアメリカ——覇権国家の文化装置』村上東編（臨川書店）が出版されているが、そうした試みとは別のかたちで、『〈日本幻想〉表象と反表象の比較文化論』野田研一編（ミネルヴァ書房）は、他者の発見から自己の発見を経て、反表象の力学（主題化されるのは、琉球・沖縄、小島信夫の小説、文化大使としてのウィリアム・フォークナー）を比較文化の観点から論じている。「見る」主体者としての英米圏によって産出された客体＝「見られた日本」の表象だけでなく、そのように「見られた」日本に対して「見られた日本」（＝客体）の側がいかなる対応＝表象を「見せる」かについても視野に入れて検証しようとしたのが、その目的のようだ。日本をめぐるこうした文化表象をマテリアルな歴史条件における解釈に置きなおすためには、どのようなやり方が考えられるだろうか。

日本にも同時多発的に進捗しつつある現代資本主義やネオリベラリズム以降の動きやそれらとともに出現したグローバルな階級再編すなわち経済的なものをはじめとするさまざまな格差の問題を、個別のかつ普遍的に捉えるためには、単なる日米間や日本と特定のアジア諸国との2国間関係のほかに、さらなる補助線を引いてみることも有効かもしれない。『ジェンダーにおける「承認」と「再分配」——格差、文化、イスラーム』越智博美・河野真太郎編（彩流社）は、制度的な枠組としては英米あるいはヨーロッパを中心とした文学・芸術からのさらなる逸脱や横断的な拡張を試みて、現代資本主義世界における格差の問題とその「外」へ向かう文化の可能性を、たとえば、次のようなかたちで、探っている。ネオリベラリズム状況におけるフェミニズムの問題を、「承認」（ジュディス・バトラー）vs「再配分」（ナンシー・フレイザー）という二項対立を超えて、批判的かつ包括的な議論へと開くために、ケアの問題、シングルマザーの困難、ポストフェミニズム状況に関する議論が、次に、米国南部のアパラチア（男性性の表象に読み取られる白人の貧困）、2人の現代美術家、根間智子・仲宗根香織の写真テキスト（『琉球独立論』の言説やネーションが依拠するジェンダー・エスニシティのイデオロギーの図式からの溢出）、フランスの地方美術館（アートの価値評価・流通をめぐる経済と政治）等が解釈の対象とされる。そして最後に、現代史すなわち21世紀いま現在からあらためて捉え直された諸文明の基底としてのイスラームが主題化される。1930年代から始められた北アフリカ・地中海地域の人類学調査において取り上げられた女の交換の問題、すなわち、現代の多文化主義的リベラリズムに対置される過去のマルクス主義的な方法の意味をあらためて思い起こすことを可能にしてくれるジェルメヌ・ティヨンの仕事の意義が紹介されたあと、残りの2章では、フランスにおける「スカーフ論争」とレイシズム・女性身体の問題、および、女子教育の必要性を訴えるマララ・ユスフザイの国連スピーチに読み解かれる知識人および「代表」の問題が提示される。

グローバリゼーション時代の「英文学」あるいはその英語文学への変容に関するこのような考察をふまえて、あらためて「英文学」の特質とはなんだったのか、そしてまた、英国の文学を中心としたおもに英語で書かれた作品あるいはテキストについてなされてきた研究・教育の意味とはなんだったのか、確認したり捉え直したりする必要があるのかもしれない。日米間や日本と特定のアジア諸国との単純な2国間の二項対立を突き崩し新たな関係性を獲得する認識見取り図（cognitive mapping）を作製するための補助線として、英国から米国へトランスアトランティックに移動し再編された「英文学」やその変容を使用してみることで、本論がいづれなすべき最終的な目的として思い描いているのはこのことだ。その際、肯定・否定の価値評価や賛否の立場表明はひとまずおいて、今後われわれが議論すべきテキストとして、是非とも、*Boundary 2* 42. 3の巻頭論文アーリフ・ディルリク（Arif Dirlik）によるスーザン・バック＝モース「民主主義——未完のプロジェクト」をめぐる論争への介入のほかに、言及だけでもしておきたいテキストがある。1988年から続く米国の文学批評・「理論」と中国の高等教育との間の文化接触・移動の軌跡を印しづけるJ・ヒリス・ミラー『無邪気な外遊記——中国における講義（*An Innocent Abroad: Lectures in China*）』がそれであり、ミラーのテキストにつけられたフレドリック・ジェイムソンの序文とともに、その歴史的意味や未来への可能性を、われわれが今存在する現在から、注意深く読み解き解釈する作業をすぐにでも本格的に開始する必要がある、と私は考えている。ただし、そうした作業を始める前に、とりあえず、ここで実際に試みるのは、より限られたものである。20世紀の第2次大戦後とりわけ冷戦期に顕著だったと思われる日本の「英文学」において、文化ヘゲモニーとしても決定的な意味を有していたと思われる「アメリカの影」を、メタ批評・「メタコメンタリー」の試みとい

うかたちで、歴史化することをつうじて、「英文学」あるいは英語文学の特質を、21世紀の現在からあらためて、吟味すること、これが本論の主要な目的である。具体的には、英語文学・「英文学」における成長の象徴・イメージを取り上げ、必ずしもこれらの分野・領域に限らず多種多様に生産されてきた成長の問題との相互規定的な関係性を論じることになるだろう。

と同時に、拡大・転回し続けるトランスパシフィックな空間において存在する可視／不可視の「アメリカ」なるものによって、ほとんど地政学的な無意識において（重層）決定されて、現在も、さまざまに変容しながら存続する「英文学」の研究・教育、あるいはまた、現在のすでいくつかの異なるかたちで進展しつつあるイングリッシュ・スタディーズが提案・提示している英語文学、たとえば、世界文学や第3世界文学やそれらについての既存の学問領域・分野を超えた研究・教育についても、批判的に吟味する。² こうした試みは、それが実際に提示されるのがたとえば「英文学」あるいは英語文学の特質を主題や到達目標とするクラスルームをふまえてのことになるので、文学批評を中心として社会的編制・歴史的形成されたりベラル・エデュケーションという教育空間とその変容の考察を含むものとなるだろう。「理論」と呼ばれたものが1980年代に登場し「ポスト理論」が自然に流通する今からずっと以前の1957年、カナダ出身の批評家ノースロップ・フライが、19世紀英国の詩人・文芸批評家マシュー・アーノルドの「教養」・「文化」概念を引き合いに出しながら、以下のように主張したことがある「教養教育（liberal education）の倫理的目的は解放する（liberation）ことにある、そしてその意味は、自由な、階級のない、洗練された社会を構想する能力を与える、ということ以外にはあり得ない。そのような社会は存在しないが、そのことこそ、教養教育が想像力によって産み出されたさまざまな作品に深くかかわらねばならないひとつの理由なのである」（Frye 347）。もしも米国の文学研究・教育における「ニュー・クリティシズム以降」の契機を画したといわれるフライの文学批評が主要な論点のひとつとして提示したこのような議論を歴史的にふまえるならば、「アメリカの影」あるいは帝国アメリカの文化／政治的拘束とそれからの解放という主題化についても、米国の冷戦イデオロギーを、とりわけ、「英文学」およびヨーロッパ文学・その他世界の文学・神話を英語の翻訳をもつうじて取り上げた教育空間に端的に見出すことができるような、冷戦期の米国リベラリズムと21世紀ポスト冷戦後の現在との完全なる切断・変化というよりは歴史的連続性を、いちどは把握したうえで思考・想像することが必要ではないか。

2. 旧来の英国教養小説論と近代国民国家の時空間における成長 ——「英文学」の特質はどう教えられてきたか

「英文学」すなわち英国のナショナルな文学の特質は、旧来の研究ならびに教育においては、ジェントルマンの概念・イメージを基本とする階級または階級意識によって論じられ説明されてきた、といえるかもしれない。たとえば、冷戦期の代表的「英文学」の研究・教育の例である教養小説論『イギリス教養小説の系譜——「紳士」から「芸術家」へ』において、川本静子はサブタイトルにあるように英国20世紀の「芸術家」へとその系譜あるいは変容をたどることができる「紳士」すなわち19世紀以降の教養小説が描くジェントルマンの理念を論じている。それは、たとえば、米国のナショナルな文学である「アメリカ文学」の研究や教育が、まずは、冷戦期に編制され生産された「アメリカの例外主義」という言説にもとづいて、行われてきたことと、対照することができるかもしれない。すなわち、英仏の帝国主義を代表とする旧ヨーロッパとは違って、アメリカの覇権あるいはそのマネーとパワーは、階級や植民地支配によって特徴づけられることはない、と。だとすれば、1990年代の多文化主義やアイデンティティ・ポリティクスつまり「差異のイデオロギー」の影響を受けたアメリカ文学研究が、ジェンダーやセクシュアリティとともに問題にすることになるのだが、人種差別を再生産し続ける人種についての差異が「アメリカ文学」の特質をめぐる議論においては前景化されてきたことになる。そして実際に、「英米文学概論」といった授業は、英国の文学と米国の文学がとりあえずナショナル리티の差異によって区別されて、A・Bといった区分を通じて、基本的にナショナルな枠組みを前提とする研究が緩やかに連動しつつも別個の教育的な実践としてそれぞれのクラスルームにおいて提示される、ということが考えられる。そして、まさにその時に、英国の文学を特徴づけるのが、ジェントルマンや階級の問題だ、ということになる。

旧来のイギリス史研究において、ジェントルマンはどのような存在として提示されてきただろうか。そして

また、それは近代英国の社会においてどのように階級の問題と重要な意味をもつものであったのか。だが、ジェントルマンの歴史的意味を考察するには、その前にジェントリ、すなわち、一定のステイタスと権威を保ちつつ20世紀初頭にいたるまで社会的影響力をもった階層とその歴史的形成について確認しておかなければならない。ジェントリまたは郷紳とは、英国における下級地主層の総称であり、貴族階級である男爵の下に位置するものとされる。治安判事など地方行政職を無給で引き受けるとともに中央官職を担う人材を供給したこの階層は、家柄の高さや所領の規模に応じて、バロネット、ナイト、エスクワイアに一応のところ分類される。ただし、下級地主層を構成するこれらの存在は、正式には貴族には含まれないものの、貴族とジェントリの間には称号や貴族院議員資格以外の特権的な差異はなく、また、社交界を通じて両者の通婚化が進みスクワイアラーキーと呼ばれる強固な地主支配体制が19世紀までに形成された、とされる。

別の言い方をすれば、近代英国社会において「ジェントルマン」という理念を実際の歴史的過程において担ったのが、この英国特有ともいえるユニークな下級地主層であった、ということだ。ジェントリという階層は、下流あるいは下層階級と異なる階級的な差異を示すだけでなく、いわば「ミドリング・ソート」つまり中間層として、上流階級への社会流動性・階級上昇の欲望とダイナミズムを歴史的に具現する存在であった。金融・交易から海外植民地との貿易・植民地経営へ、そしてさらに「世界の工場」としての英国をものづくりで支えた製造業にいたるまで、立身出世の手段は変わっても、ビジネスで成功しその仕上げとして土地を買い取り上流階級になるというライフコース（ライフスタイル）・成長物語を英国の歴史的発展において歩んだ中間層が、ジェントリのようなものだ。さらに念のために付け加えておくと、地主支配体制の一端を中央および地方において「ジェントルマン」として担うこの社会階層は、戦争、治安維持・収税、慈善事業による社会貢献、等々を行う、地域社会に奉仕する名士としてのステイタスと名声を得ている点で、単に商業的に成功した新興の富裕者、つまり、自己の利益だけしか顧みない成り上がり者とは差異化され区別される存在であった。こうして、初期近代に勃興しその後やがて「ジェントルマン」を供給・再生産することになるジェントリは、貴族とともに上流階級＝「地主貴族層」を構成するものだ、ということになる（村岡・川北；ブリッグズ；Colley）。

たとえば、1960年代に発表されたベリー・アンダーソンによる英国史に関する挑発的な研究提言を説明・敷衍した議論によれば（青山ほか 203-211）、ジェントルマンの理念とは、英国上流階級としての貴族あるいは「地主貴族層」の表象・イメージにほかならず、近代英国社会のナショナルな歴史におけるその歴史的意味は、強固な地主支配体制のイデオロギーの再生産である、ということになる。理想化されたジェントルマン像あるいは地主階級のイデオロギー的表象は、産業革命以降による19世紀においても、というよりはむしろ、その激動の時代においてこそ、疑似封建社会の秩序や身分の階層関係を維持・再生産する機能をはたし、地主階級による支配の正当性の承認を支え続ける意味をもった。産業資本家あるいはブルジョワジーもそしてまた労働者階級すらも、政治の支配階級である地主階級が同時に英国社会における価値意識の支配者でもあって、彼らの価値意識をそのまま受け入れるような被支配階級を含む英国社会全体の価値体系であった。当時の英国資本主義社会が陥っている「現在の危機の諸起源」を批判的に検討したアンダーソン自身、以下のように論じている。

British society is notoriously characterized by a seemingly 'feudal' hierarchy of orders and ranks, distinguished by a multiplicity of trivial but ceremonial insignia—accent, vocabulary, diet, dress, recreation, etc. This hierarchy corresponds neither to the primary reality of a society divided into economically-based classes, nor even to the secondary reality of limited individual mobility within this system. It is, however, the projective image of society naturally held and propagated by a landowning class. The pattern of social relations in the countryside at the height of this class's economic power, compounded of rank, deference and tradition, became the fundamental model of social relations in English society as a whole—even after industrialization—because of the continued political leadership of this class. After the industrial revolution, the mythology of rank-order seduced and so subjugated the nascent bourgeoisie, producing the famous social climbing of the middle-class, its craving for titles, etc. It also acted as a powerful mystification of real social relations for the working-class as well. For although the working-class itself continued instinctively to use a bipolar language ('us' and 'them') to describe its situation, leaders of the working-class movement, who existed in an overlapping zone in constant contact with representatives and institutions of the dominant bloc, tended to absorb false, 'feudal' consciousness. (Anderson 39-40)

「地主階級の経済力が絶頂にあった時の農村社会における地位・服従・伝統の組みあわされた社会関係のパターン」、すなわち、貴族とともにジェントリが構成する地主貴族層によるブルジョワジー・労働者階級に対する支配体制が、「工業化ののちですら」「この階級のひき続く政治的指導権のゆえに、総体としての英国社会における社会諸関係の基本的なモデル」となった (Anderson 39-40)。ここで問題となっているのは何か。英国社会の特質をなすイデオロギー的なイメージは、あるいは、その社会関係・階級の問題は——“the projective image of society naturally held and propagated by a landowning class.” (Anderson 39) ——、英国の特異な「地主貴族層」であるジェントルマンの表象を中心に規定され編制されたものであった、というのがアンダーソンの論点だ。「産業革命ののち、身分と地位の神話は、初期ブルジョワジーを誘惑することで従属させ、中産階級の有名な社会的上昇、称号に対する渴望などを生んだ。それはまた労働者階級に対しても現実の社会的諸関係の強力な神秘化として作用した」(Anderson 40)。近代英国の歴史に関するアンダーソンの提言を端的に説明するなら次のようになる。支配／被支配あるいは階級に関わる社会関係の転倒・奪取というよりは、存続する支配階級を自らもイデオロギー的に取り込まれるべく欲望してしまう中産階級の階級上昇の物語やイメージこそ——あるいは、名士や社会貢献といったタームで上品なかたちで化粧がほどこされ神秘化された立身出世ストーリーこそ——、ジェントルマンの存在にほかならない。言い換えるならば、「英文学」の特質は、近代国民国家の時空間におけるジェントリという表象、すなわち、さまざまな始まり (beginning(s)) においては孤児のように社会的出自が明確でない存在から都会に出てジェントルマンへと階級の階段を上る成長の物語、そして、地域社会の立派な名士・名望家として「地主貴族層」に合体し取り込まれることを目的=結末 (end) とする物語によって、教えられてきた、ということだ。

こうした旧来の歴史研究の議論を、さらに、階級上昇の文学的文化的物語や教育制度・政策の問題への接続に向けて敷衍するために、とりあえずは、以下の2点に目印をつけておこうか。「それでは『ブルジョワジーを誘惑し、中産階級の有名な社会的上昇を生んだ身分と地位の神話』とは何かといえば、それは、あのいわく言いがたいジェントルマンの理念であって、ここでは便宜上それを、単に伝統的体制が鍛え出してきたイギリス人の理想像であるとしてだけ説明しておこう」(青山ほか 206)。と同時に、旧来のイギリス史研究は、文学的物語や文化的イメージのほかに、それらが(再)生産・流通・消費されるメディアや社会制度とりわけ教育制度に関しても説明を付け加えていたことも忘れるべきではないだろう、ブルジョワジーを誘惑し「体制内化させるうえで有効に働いた」のが、パブリック・スクールとオクスフォード、ケンブリッジ両大学におけるエリート教育・「教養教育 (liberal education)」であったということ (青山ほか 207)。

さて、ここでいよいよ、「英文学」の特質であるジェントルマンや階級の問題を、具体的なテキストとその解釈をつうじて、確認してみよう。そして、このような「英文学」を、たとえば以下にみるように19世紀英国小説とりわけ教養小説の物語を読んだり解釈したりする経験をつうじて確認するとき、英国のナショナルな文学の特質が、成長の表象やイメージと深く結びついていることを理解することになるだろう。端的に言って、教養小説とは、ジェントルマンへと主人公が成長するナラティヴを表象するテキストにほかならなかった。³

川本静子は、すでに言及した『イギリス教養小説の系譜』第1章第2節「教養小説の登場」において、チャールズ・ディケンズ『デイヴィッド・カップフィールド』を取り上げ、論じている。教養小説として登場したとされるこのディケンズの小説の主人公の根本的特徴を、川本は、「単純から複雑へ」、「未熟から成熟へ」、あるいは「無垢から経験」へと展開する「成長する主人公 (developing hero)」としている。E・M・フォスターの小説論にならって、物語の始まりから結末まで変わらないお約束のストック・キャラクターつまりフラットなキャラクターではなく、さまざまな試練や逆境を経験することで人間形成あるいは精神成長を成し遂げるラウンドな性格造型がこうした主人公にはほどこされている、といってもいいかもしれない (川本54)。

どこにも居場所をみつけないことのできない孤独な個人として神秘化されイデオロギー的イメージとして機能するデイヴィッド、換言すれば、そうしたイデオロギー的ヴェールの隙間に透けてみえるジェントルマンとしての主人公が抱える階級関係に関わる矛盾が、英国教養小説における成長の物語のネガティヴな側面・イデオロギー的どんづまりを炙り出す陰画であるとするなら、そうした矛盾をさらにイデオロギー的に転位しいくらかでもポジティヴな成長の物語を心温まる形式で主題化しているのは、川本が最後に論じるデイヴィッドをめぐる愛の問題といえるかもしれない。『デイヴィッド・カップフィールド』の主人公は、小さなエムリーに対する少年の日の愛、妖精ドーラに対する愛、そして穏やかなアグネスに対する愛を経験するが、これら3つの愛はす

べて、彼の精神成長に、影響を与える。最初の2つの愛は、「最後の真実の愛にいたる布石」であり、とりわけ、「ドーラを愛するデイヴィドとアグネスを愛する彼とは同一人物ではない」。後者は前者を経て導き出されたものであり、「愛は主人公のビルドゥングを完遂させる大きな試練の一つなのである」（川本66）。社会小説における主人公の愛は、ある社会的意義——ディズレーリの小説『スイビル』におけるエガートンとスイビルの愛が象徴する貴族階級と労働者階級との結合、あるいは、ギヤスケル夫人『北と南』における産業資本家ソートンと牧師の娘マーガレットとの愛のアレゴリーによって表象される北イングランドの工業の新興階級である産業資本家に対する南の農業に基盤をもつ旧体制の紳士階級による是認——をもったものであって、主人公の成長の原因もしくは結果として彼の精神発達に寄与するものではないのに対して、川本の解釈によれば、教養小説の主人公をめぐる愛は人間的関係（human terms）において捉えられたものでそこでは愛が主人公の精神発達に寄与するものとして表現されている。『デイヴィド・カッパフィールド』以降の教養小説が提示する愛は、社会的関係（social terms）から切り離されもはや共存することのない、「純粹に人間的関係」で捉えられている（川本66-67）。

愛の対象となる人間が、どの階級の人間であるかということより、どんな人間であるかという問題が、ここでは重要なのである。愛が階級・身分・財産を結び目とする人間関係から、資質・思考・情緒（ハーディ以降は肉体も）を結び目とする人間関係として捉えられるようになるのは、ビルドゥングスロマンにおいてである。（川本67-68）

このようにして、川本に代表されるような旧来の教養小説論は、「主人公の愛の遍歴は、彼の精神発達の遍歴でもあるのだ」と主張して議論を閉じている。

さてここで、たっただいまその議論を追い確認を終えた教養小説を範例とする「英文学」における成長の表象・イメージに関する旧来の解釈を、これまた旧来のイギリス史研究の領域において論じられてきた成長や階級の問題と、あらためて突き合わせることにし、その関係性についても確認しなければならない。後者の研究において、「ミドリング・ソート」つまり中間層として、上流階級への社会流動性・階級上昇の欲望とダイナミズムを歴史的に具現する存在として、ジェントリという階層が重要な機能をはたすことが論じられていた。初期近代の商人・市民による金融・交易や海外貿易・植民地経営であれ、近代の産業資本家による製造業であれ、立身出世のやり方や遍歴のコースは変わっても、ビジネスで成功しその仕上げとして土地を買い取り上流階級になるという成長物語の主人公が、英国の歴史的発展において特異かつ重要な役割を担った階級的中間層ジェントリであった。このナショナルな歴史的物語の主人公であるジェントリと『イギリス教養小説の系譜』が提示する教養小説の主人公である紳士との間に、どのように相互の関係をみだし確認したらよいのだろうか。端的に疑問を發するなら以下のようなだろう。はたして、英国教養小説『デイヴィド・カッパフィールド』において、ビジネスで成功したうえで地主貴族層となるべく土地を買い取りジェントルマンになる主人公の成長の過程が明示的なナラティブのかたちで提示されているだろうか。川本が実際の教養小説のテキストの解釈において肯定的に提示する理想的ジェントルマンのイメージとアンダーソン等が特異な歴史的な存在として場合によっては批判的にも取り上げるジェントリとの間には、少なからざる齟齬があるように思われる。

実のところ、さらなる読み直しをメタコメンタリーのかたちで実践してみればわかることなのだが、川本の英国教養小説論は、ビジネスにおける成功や立身出世の表象を強力に否定するもうひとつ別のディケンズが書いた教養小説により高い価値評価を付与しより肯定的に論じることによって、成立している。第1章第4節「『紳士』への道——『大いなる遺産』」の議論を再読してみよう。『大いなる遺産』は『デイヴィド・カッパフィールド』に続くディケンズ第2の教養小説として位置づけられており、成長するにつれほかのキャラクターたちの背後に埋没していったデイヴィドとは違って、つねに作品の中心的要素として追及されている主人公ピップの個性と人格は、精神発達という主題をより明確に一貫して展開したものだとして川本によって評価されている。これは、ジェントルマンの表象や意味に関しても、より深い探求がなされているという価値判断にもつながる。「ピップは、遺産相続の見込みという幸運に恵まれて、かじ屋の徒弟から紳士への階段を上る。…『紳士であること』の意味は…一つの社会的・道徳的問いにならざるを得ない。『紳士とは何か』——ディケンズはピップの人間形成を通して、時代の課題に一つの解答を提示しているのである」（川本86-87）。

このように道徳的な問題として設定されたジェントルマン表象の意味が、経済的成功や立身出世を否定することによって成り立つのはなぜか。『大いなる遺産』においては、身分的にジェントルマンであること＝富と階級的地位を獲得する立身出世にサクセスすることと人格的にジェントルマンであること＝道徳的に善であることは、必ずしも一致しない。⁴ 名も知らぬ恩恵者から金を手にしてロンドンで紳士修業といいながら無為の生活を送り道徳的に墮落したピップが、かつての友人ジョーのかじ屋職人、あるいはまた、恩恵者が実は植民地オーストラリアから帰ってきた脱獄囚であったことが知れたあとのマグウィッチに示す階級感情に、その答えを探ることができる。ジョーの親切に忘恩で報いたピップに対し、社会のつまはじきものでありながらピップの親切に感謝と愛で応えたマグウィッチに道徳的価値を認識することになるピップの表象が示すのは、「階級問題をモラルの問題に置換」（川本93）するレトリックとそのレトリックのイデオロギ的機能である。『大いなる遺産』の主人公は、最終的に、精神成長を遂げ自己確立をしたとみなされるにもかかわらず、自らの属す場や明確に階級的な居場所をみつけないで孤立の状態で物語が終わることになる。そして、このように精神成長を達成した主人公をジェントルマンすなわち「地主貴族層」へ上昇させるどころかむしろ世俗的・現世的意味では敗残者にしてしまい結局英国のナショナルな時空間の外へ社会のアウトサイダーとして押しやることになる物語——世俗のサクセスもなければデイヴィドにとってのアグネスにあたる良妻賢母型の理想的女性像ビディとも結ばれない、つまり、英国社会のどこにも帰属すべき階級や居場所がないピップは、きわめてあいまいな社会的身分のまま親友ハーバートの事業に雇われ故国を去ることになる——を、川本の解釈は、きわめて道徳的な解答を与えた物語として高く評価している（川本95）。

金を片手に「紳士」への階段を駆け上がっていた彼は、理想的人間形成とは「道徳的にすぐれた人間」になることであり、単に身分的に「紳士」になることではないと悟るのである。こうしたピップの人間形成の背後には、人間を道徳的存在として把握し、愛を人間性最高の美德と考えるディケンズの信念がある。「紳士とは何か」の問題は、「あるべき人間像とは何か」の問題にここでは還元されているのだ。（川本95）

「英文学」の特質をなす19世紀以降の英国教養小説、とりわけ、その範例として『デイヴィド・カップフィールド』よりもふさわしい『大いなる遺産』において、何もしない人間としてのジェントルマンから道徳的にすぐれた人間へと成長したピップこそ、真の精神成長を具現しており、そしてまた、まさにそのことによってジェントルマンの意味を表現している、ということになるだろうか。

川本『イギリス教養小説の系譜』の英国教養小説をめぐるこうしたいくつかの競合し必ずしも一貫しているとはいえない論点の共存をふまえたうえで、もう一度、英国教養小説としての『デイヴィド・カップフィールド』に立ち返りメタコメンタリーの作業を進めてみるならば、そこには実は立身出世の主題やイメージが具体的な物語の例証や分析・解釈なしにひそやかなかたちで、挿入されていることがわかる。

『デイヴィド・カップフィールド』のあらすじは、両親に早く死別した少年が、刻苦勉勵の人生行路を歩み、ついに紳士としての社会的地位と経済的・家庭的安定を得るに至った誠にめでたい話ということになる。すなわち、それは、中産階級の生活理想を具現した出世物語であり、中産階級的美徳が、幸福と富へのパスポートとして謳われている。ここでは、主人公のビルドゥング即立身出世であり、デイヴィドの個性と市民的生活秩序との間には、いまだ矛盾が生じていない。（川本87）

このように解釈するのであれば、本論で先に提示したような疑義は生じない、すなわち、英国教養小説における理想的ジェントルマン像とアンダーソン等が歴史的に吟味するジェントリとの間の齟齬はない、ように思われる。それにしてもしかし、主人公デイヴィドの精神成長＝立身出世という指摘がなされるのは、実のところ、第1章第4節の『大いなる遺産』になってはじめて挿入されているものだ。なぜ、第1章第2節『デイヴィド・カップフィールド』論のところではひとことも言及すらされないことなく、英国教養小説の系譜を歴史的に進行させたあと、遅延をとまなないながら前とは差異を孕んだ論点が反復されなければならなかったのか、まるでテキストの統一の意味をさまざまな差異・矛盾関係によって読み直し歴史のダイナミズムに開いていく脱構築批評が代補（supplement）と呼んだ修辭的作用のように。

さらに、旧来の「英文学」研究と旧来のイギリス史研究との齟齬を解消するうえで、もうひとつ大きな問題が残っている。一見したところ後者と折り合いが付きそうな川本の解釈の論点、すなわち、主人公デイヴィドが精神成長と自己確立を通じて獲得したとされる「経済的安定」や「幸福」をマテリアルなレベルで支える「富」とは、具体的には何なのか、そもそも、彼はいったいどのような手段によったのか？⁵ それは、はたして、商業資本、それとも、産業資本、あるいは、ロンドン、シティを結節点にグローバルに転回する金融資本または大英帝国が支配する植民地に特別に由来するものなのか？ そうしたサクセスを成し遂げて、しかるのち、英国の支配階級によって承認をえたのか？ 『イギリス教養小説の系譜』のどこを読み直してみても、具体的な記述・説明すなわち引用や解釈をみつけることはむずかしい。言い換えれば、ここで実践した読み直しやメタコメントリーがあきらかにしたように、旧来の英国教養小説論と旧来の階級についてのイギリス史研究、そしてさらには、英国のナショナルな歴史やグローバルな資本主義世界の歴史的過程との関係について、統一的就つまた総合的に理解するのが困難なままにあることがわかる。

3. 旧来の英国教養小説論を米国の冷戦イデオロギーによって歴史化する

ここであらためて、英国教養小説における成長の表象・イメージが、必ずしも「英文学」という分野に限らずイギリス史研究のような別の領域で生産されてきた成長の概念・言説と、絶えず関係しながら論じられ規定されてきたことを思い出してもいいかもしれない。『イギリス教養小説の系譜』第1章第1節「教養小説の前駆」において、1850年以降に登場・展開した英国教養小説の主人公にみる人間形成の大きな特質は個人と社会、自と他の隔絶・相克からなる孤独である、と川本は主張している(川本46)。そしてまた、『イギリス教養小説の系譜』第1章第2節「教養小説の登場」には、下層中産階級出でありながら靴墨工場で少年労働者に身を落としたディケンズ自身、一度は中産階級向けの学校に入り教育をうけながらロンドンのマードストーン・グランビー商会において週7シリングで瓶を洗ったりコルクをはめたりするような肉体労働をする少年労働者として社会のどこにも居場所・階級的な帰属意識をもたない彼の教養小説の主人公デイヴィドについて、実際、次のような解釈がなされていた。「デイヴィドの心に、中産階級感情が如何に深く根ざしていようと、彼が中産階級から脱落した人間であることに間違いはない。中産階級の中にも労働者階級の中にも、自分の占める場のない彼は、社会の中の異邦人であった。主人公が彼を囲む周囲に対して抱くこの隔絶感——これが従来主人公にないデイヴィドの根本的特質であり、ビルドゥングスロマンの主人公に共通の特質である」(川本62)。本格的な教養小説の主人公には、社会小説の主人公にみる社会改良への志はない、まして、社会の根本的な変容を政治的にもたらすようなユートピア的欲望など望むべくもない。もし大学における研究ならびにクラスルームのような教育空間において教養小説としてその文学的価値を高く評価するといふのであれば、労働者階級との連帯も、そしてまた、社会意識にめざめ労働者階級のためにつくすという紳士としての立脚地も、デイヴィドにはありえない、否、あってはならない、ということだ(川本62)。

だとするならば、19世紀英国の教養小説の主人公の根本的特質は、デイヴィドにみられる孤独、中産階級のなかにも労働者階級のなかにも自分の居場所をみつけることのできない寂しく孤立した個人の修辭的イメージに刻印された隔絶すなわち社会流動性や階級の問題をめぐる矛盾にある、とわれわれは読み直さなければならないのではないか。このように孤独な主人公のイメージでひそかに表象された英国の階級の問題とりわけジェントルマンをめぐる矛盾は、もうひとつ別の教養小説の範例としてのディケンズ『大いなる遺産』にみられたものであったことを、思い出してもいいかもしれない。

ところで、こうした孤独な主人公と対照されていたのが、1837年という社会小説がむしろ興隆し支配的ジャンルであった時代に生産されたブルワー・リットン『アーネスト・マルトラヴァーズ』の主人公であった。アーネストの人間嫌いは、婚約者の死と自著の不評を原因とする一時的なものでしかなく、彼は社会小説の主人公たちと同様、ジェレミー・ベンサム等による功利主義の理論に基づく社会改良を実践する夢のもとに社会のなかに比較的居心地のいい居場所を得る。主人公の個人的成長が社会的実用性をもっている、つまりアーネストの精神成長と社会改良の実践とが同一平面上で交錯・連続しうるものであることに、川本の英国教養小説研究の言説は、明らかに比較的否定的な身振りで、注目している。こうして、教養小説の前駆と川本によってみなされるリットンの小説の主人公アーネストの人間形成は、実のところ社会小説の主人公の人間形成や成長

と根本的に同質のものとなされる(川本46)。

興味深いのはアーネストが獲得し占めることになる居場所・社会的場が、ウォルター・バジヨットのいう「教育ある一万人」のひとりとして、地方行政にたずさわりかつまた庶民院議員として国政に参与する輝かしい栄光の座と呼ぶべきものであることだ。このようにリットンの小説を教養小説ではなく社会小説として否定的に評価する際に、英国社会やジェントルマンに関して川本のテキストの読みや解釈が前提とする歴史的解釈があることに、われわれは注目しよう。それは中村英勝「イギリス議会政治体制発展の諸段階について」『お茶の水女子大学人文科学紀要』18(1965):87-138という研究だ。中村の研究が提示した英国における独特な議会政治体制の発展・成長の問題を19世紀英国小説の主人公の個人的精神成長と相互に関連付けながら、川本の教養小説解釈は次のように論じている。

1832年の第1次選挙改正は、中産階級乃至ブルジョワジーの勝利というより、従来の支配階級たる地主・貴族階級の基盤の強化であったと今日では解されている。したがって、1832年の改革後も、地方におけるジェントリー階級の支配体制は、依然として継続し盤石の重みを保っていた。この社会的背景をふまえてのアーネストの自覚は、治安判事を中心とする名望家支配体制(ちなみに、このイギリス的地方行政の体制は、12ないし13世紀に端を発するものだが、18世紀に絶頂に達し、19世紀末における近代的地方行政制度の出現まで続くものである)の確立した時代にあつて、地方自治の重責を担うジェントリーの一員としての自覚にほかならない。進歩の観念(Idea of Progress)と国政の担い手たるジェントリー階級としての自負、これらが、アーネスト・マルトラヴァーズの政治的ビルドゥングを支える2本柱である。(川本45)

ここで川本が提示している議論が、ペリー・アンダーソンによる英国資本主義社会やその特異な階級上昇の物語・レトリックに特徴づけられるジェントルマンや階級の問題の議論、ならびに、アンダーソンを受容した旧来の日本のイギリス史研究にみられたものと、ほぼ同質のものであることは、あきらかであろう。歴史自体の関係性はとりあえず括弧に括るなら、英国の文学と歴史それぞれの研究分野・領域の齟齬を解消するために、教養小説ではなく、むしろ、社会小説を取り上げるべきだったのであろうか、それも、学会その他の研究においてだけでなくクラスルームといった教育空間においても取り上げるべきだったのであろうか。

19世紀英国の立身出世の物語といえばサミュエル・スマイルズの『セルフ・ヘルプ』(邦訳『西国立志編』)が思い浮かぶが、このような英文学史の教科書やアンソロジーにはキャンオンとしてほとんど取り上げられることのないテキストを、たとえばカルチュラル・スタディーズの手法または社会学的アプローチによって分析・解釈してみるべきであろうか。ここではもともとは英国出身だがアメリカで教育を受けその後1990年には英国のシェフィールド大学日本研究センターでも仕事をしたE・H・キンモンスの教育社会学の研究に依拠しながら、スマイルズについて簡単に確認しておきたい。いうまでもなく、『セルフ・ヘルプ』は、徳川家に雇用された儒学者であった中村敬宇が世界一の富と軍事力を誇った最盛期の大英帝国の精神的・道徳的強さの秘密を英国で出会った友人に贈られたスマイルズの本にみいだしたものであり、近代に移行する日本のために翻訳したものであった。『立身出世の社会史——サムライからサラリーマンへ』と邦訳されたこの立身出世物語の日本における受容の歴史を書いたキンモンスの経歴も興味深い。もともと財政学や経営学を学んだのちに日本語の勉強を始める一方で、現代中国史の分野で文化革命における経営思想についての研究で修士号を取得し、その後、本格的に近代日本史の研究として博士論文にまとめたのが『立身出世の社会史』であった。

労働の福音を前景化することにより産業革命以降の工業化すなわち機械や産業資本の驚異的な力をヒューマナイズし制御しようとしたカーライルの『英雄崇拜論』というドイツ観念論・精神主義による文化論を大衆化・民主主義化したモノとみなされることもあるスマイルズのテキストは、キンモンスによれば、「品行主義(character ethic)」と呼ばれるジャンルのなかで重要な作品とされる。「品行主義」においては、立身出世や偉業はなんといっても各個人の品行に関わる美質、たとえば、努力・勤勉・節儉・忍耐・注意深さ、の産物とされる。相互の援助や協同グループすなわち今日アソシエーションと呼ばれるものを否定するものではなかったが、立身出世とそれを産み出す品行主義は、個人の外のなにもものも当てにしないものであった。品行に関わる美質を日々実践することが個人に求められたのであり、スマイルズは、立身出世を、金儲けや地位の上昇といった成功ではなく、物質的・文化的いづれにしても現代文明の進化に寄与するようななにか意味あることを

成し遂げることと考えていた。そして、スマイルズが『セルフ・ヘルプ』の有名無名に関わらず無数の主人公として最も関心を寄せたのが、技術的なイノベーションをもたらした製造業者・科学者・技術者であった。そのなかでも特に、「工業の英雄」の名に値するような製造業者が、軍人に負けず劣らず、英雄的な存在としてあるいは英国のリーダーとして、高らかに讃えられた。すなわち、スマイルズのテキストが表象する主人公あるいは民主主義的な英雄は、品行主義という美徳を実践するような、なによりも道徳的に優越した存在であり、労働者階級のブルジョワへの上昇を否定するわけではないが、新興工業経営者すなわち産業資本家が、中心的な担い手となっていた（キンモンス23-31）。こうした産業資本家あるいは工業ブルジョワジーと「地主貴族層」に階級上昇をつうじて仲間入りするジェントルマンとの関係が、ギヤスケル夫人やシャーロット・ブロンテのいくつかの小説、教養小説というよりは社会小説と呼ばれるテキスト群に描かれるような階級関係の表象とどのように交錯するのかといった問題はまた別の研究を紐解く必要があるが、少なくとも、ディケンズの代表的教養小説のひとつ『デイヴィッド・カップフィールド』では明示的な描写やイメージで表象されない側面を補足するものかもしれない。

しかしながら、本論がキンモンスの教育社会学あるいは立身出世についての社会学的歴史研究に注目するのは、この本が出版された1981年日本の製造業や技術が世界で1番ともてはやされた歴史的時点から振り返って、明治から大正・昭和へ、つまり、日清・日露および第1次大戦を経て、さらに満州へのコロニアルというよりはむしろポストコロニアルとみなしてもいいような拡張や資本の投下と第2次大戦にいたる日本の支配層・エリート層の成長の物語やあるいは失敗・挫折を内面化して煩悶する青年たちが存在する歴史的可能性の条件あるいはマテリアルな条件を、立身出世をめぐる市場の構造変化や経済成長の変容によって説明してみせたところだけにだけあるわけではない。また、丸山真男の近代主義にみられるような近代主義的な歴史像やファシズム論——昭和戦時体制の特質を「封建的なものの残存」といった視点から説明する歴史像——に文句なく賛同するからというわけでもない（この点を論じるには、キンモンスの研究自体を可能にした歴史的条件をナショナルおよびグローバルに確認する作業が必要となるだろう）。本論で注目したい点は、「はじめに」で提示されている議論、すなわち、西洋社会で生産・流通している日本のステレオタイプ化した表象やイメージに対する異議申し立て、および、その異議申し立てが米国の冷戦イデオロギー批判ともなっているところにある。「西洋では、あるいは少なくとも英米では、個々人の競争を中心とし、自分の利益の最大化だけに関心を払った出世や業績という考えや著作の伝統があり、対照的に、日本では、調和や集団的努力や集団に利益が強調される伝統があった」（キンモンス12）。このように、まずは、英米＝個人主義vs日本＝集団主義というあの固定した差別を含んだイメージに対する不同意が提示されているわけだが、それに加えて、キンモンスは、そうしたステレオタイプ化された日本像がどのように冷戦イデオロギーと関係があったのかを示唆する以下のようなコメントを差し出している。

研究していく中で私が気づいたのは、集団志向の企業家対利益志向の企業家という図式は、日本の経済史や社会史の中でよりもむしろ米国の政治史の中で求められたのではないかということだった。1920年代から30年代にかけて書かれた企業家の自伝、伝記や偉人伝に依拠して、日本の企業家は共同体中心の価値観を持った企業家であるというイメージが作られ、その企業家像が、戦後の米国でもてはやされた。それは冷戦体制のおかげであった。米国の学者は後発諸国の近代化に関する、非社会主義的なモデルを探していた。日本とその共同体志向の企業家は、非社会主義的であると同時に、従来の（英米の）レッセ・フェール型よりも慈恵的なので、彼らの求めていたものにぴったりだったのである。（キンモンス12）

批判の対象となっているのは、第2次大戦後の米国の冷戦体制において後発諸国の近代化を研究した米国の学者であり、彼らは、ソ連を代表とする社会主義でもなければそれまで覇権を握っていた大英帝国のレッセ・フェールでもない、ニュー・ディール以降の計画経済を対ソ冷戦イデオロギー抗争のために変容させたりベラリズムによって米国の官僚制的資本主義を巧妙に正当化し、日本を手始めに東アジアの国々を西側資本主義陣営に取り込む機能を担った、というのがキンモンスの示唆が含意していることだ。そして、こうした異議申し立てをされた学者の具体的な固有名と研究書が、注で言及されているのだが、なかでも興味深いのは、米国の日本研究者ロバート・N・ベラーのものである。原著（Robert N. Bellah, *Tokugawa Religion*. New York: Free

Press, 1957.) は、フライの著作と同じ1957年出版であり、この日本語訳(『日本近代化と宗教倫理』堀・池田訳 東京: 未来社, 1971.) は、川本の教養小説論が出版された1970年代はじめであった。ベラーは、タルコット・パーソンズやマックス・ウェーバーの議論を用いて徳川時代の日本の文化を社会的に分析したわけだが、このような解釈や価値判断は、1960年日本で開催された「箱根会議」において一挙に流通・浸透することになる。封建制がマイナスどころかむしろそれがプラスあるいは根本的な源となって近代化に成功した日本を再評価するイデオロギーの編制において産み出され機能したものであった。米国の冷戦イデオロギーにとって、日本の近代化は、近年における国家発展の最もすばらしい物語のひとつと称賛された(Conrad; 辛島)。

「英文学」の特質を論じる本論がその主要な議論に関連して取り上げてきた成長の主題に関わるもので、日本の近代化を再評価したベラーの著作と同じ1957年に生産されたあるテキストを始まりとし1960年にまとまったかたちで出版されたウォルト・ロストウ『経済成長の諸段階——一つの非共産主義宣言』(W. W. Rostow, *The Stages of Economic Growth: A Non-Communist Manifesto*. Cambridge: Cambridge UP, 1960.) についても、ここで、確認しておきたい。日本語訳は、1961年、社会思想研究会の中心人物であった木村健康とフェビア研究所の久保まち子、そして、村上泰亮により、ダイヤモンド社より出ている。

ロストウといえば、安全保障担当の高官として1960年代米国のケネディならびにジョンソン政権に入り66年には大統領特別補佐官にもなり、いわゆる「ベスト・アンド・ブライテスト」のひとりとしてヴェトナム介入に関わった人物としても有名だが、彼の教育はイェール大学で学んだあとローズ奨学金を得てオクスフォード大学に留学し、そこで1922年に新聞メディア王ハームズワース一族のひとりが創設したアメリカ史講座(ハームズワース講座)で、また、ケンブリッジ大学でも、教えたのち、1950年から61年まではマサチューセッツ工科大学(MIT)の経済学の教授となった。そして、ロストウの経済成長論の萌芽となるテキストを、1957年、MIT国際問題研究所(Center for International Studies, CIS)において、所長マックス・ミリカンとともに作成する。近代化論にもとづいた政策提言書 *A Proposal: Key to an Effective Foreign Policy*. New York: Harper, 1957 がそれである。その直後の1958年には英国のケンブリッジ大学に滞在し、ケインズやケインズ派の経済学・経済政策が無視してきた経済成長について講義を行いその要旨を英国の経済誌『エコノミスト』1959年8月15日、8月22日に掲載、これらの仕事を最終的にまとめたのが『経済成長の諸段階』であった。数値・数量的アプローチを重視する技術性・中立性を前面に押し出す社会工学的な議論が、脱政治的な「活力ある中心(the vital center)」(アーサー・M・シュレジンガー)・「中道主義の原則」を唱えた米国の冷戦イデオロギーの延長にあることは、副題にある「一つの非共産主義宣言」がマルクスの「共産党宣言」をアイロニーに味付けされた反復となっていることにあきらかだ。

成長というタームの使用や意味について注目してあらためて「英文学」における意味と比較するなら、川本による英国の教養小説論における成長はドイツ語の *Bildung* を19世紀英国の英語文学・文化において受容した精神成長・人間形成であったが、近代化(modernization)の議論においても成長は使われていたのであり、ここでは、成長の表象は、同じ成長という言葉が使われても、それは非精神的・物質的な成長すなわち経済成長であることがわかる。そして、この経済における成長は、政治あるいはイデオロギーのレベルとも区別されるもので、開発(development)として表象され流通している。戦後日本の地域研究=エリア・スタディーズとりわけ「帝国日本のアジア研究」を戦前・戦中からエリート層の人脈あるいは知・権力・マネーおよびメディアのネットワークの連続性に注目する「貫戦史」という視座から問い直した辛島理人のまとめによれば、次のようになる。

近代化論は、経済発展に関する一般的かつ本質的な形式の存在を前提としており、それは技術、軍事、官僚制、政治・社会構造の進歩によって定義される「伝統」から「近代」への諸段階に、各社会が分類できるとした。ロストウの議論は西洋の近代化をモデルとし、あらゆる社会が5つの段階に分けられるとした。第1が「伝統社会」、次に「テイクオフへの準備段階」、そして「テイクオフ・離陸段階」となって、第4段階の「成熟への前段」、最後がアメリカの現代社会を一般化した「大量消費の時代」である。(辛島220-21)

このような近代化論によれば、あらゆる伝統社会がアメリカのライフスタイルに到達することになると想定され、それを実際に実現するために米国主導による「途上国への経済援助」を正当化することになる。⁶ ロスト

ウの歴史的变化の分析あるいは成長物語においては、成長するとは、たとえ植民地化された過去をもつ開発途上国であってもロストウが示した諸段階を経てどのような南国も近代化を達成すること、すなわち、文化の違いはあっても最終的にすべての地域がアメリカ化した社会に収斂することにほかならなかった。

川本が指摘したジェントルマンをめぐる市民と芸術家への分裂、すなわち、紳士がナショナルな国民国家の時空間である社会のどこにも居場所をみつけないことができず孤独や煩悶として経験するパブリック／プライベートの分裂・断片化とは対照的に、あるいはむしろ、そうした分裂や断片化を一挙に数値化されるような経済的アプローチによって解決してしまうような政策が強く米国から世界のさまざまな国々へ発信されていることになる。別の言い方をすれば、近代化論すなわち中立性・客観性の外面を纏いながらも統計上の数値・数量により人間存在の人間性を剥奪する（dehumanize）経済成長を政策として提言・実行するきわめて米国中心的な冷戦イデオロギーに対して、川本の教養小説論が提示した「英文学」はそれに対して根本的な叛乱・倒立というよりは抵抗・転覆の身振りを示すことでそうした状況下においてサヴァイヴァルしようとする試み、つまり、そうした試みが冷戦下の資本主義世界における労働力としての人間・人材の再生産につながるだけにしても心理学化されたレベルではそれなりの想像的解決を試み慰めを得ようとする意味をもっていたとみなすことも可能かもしれない。

19世紀以降の英国に登場し展開した教養小説の系譜をさらに19世紀末に出来たジェントルマンの市民（＝紳士）と芸術家との分裂をへて20世紀初頭のモダニズム期における芸術家小説の確立にまでたどった川本は、（モダニズムが制度化される過程にあった）1940年代・50年代に芸術家小説が存続し続けていることを指摘して、その教養小説論の議論を閉じている。

ジョイス以降のイギリス小説にも、スティーヴン・スペンダーの『おくての息子』（1940）やアンソニー・ポウエル『躰の問題』（1951）・『買手市場』（1952）・『手形の世界』（1955）などの連作小説、あるいはローレンス・ダレルの『アレクサンドリア四重奏』（すなわち、『ジュスティース』（1957）、『バルタザール』（1958）、『マウント・オリーヴ』（1958）、『クレア』（1960）の四部作）などに、この種の小説系譜の展開を辿ることができる。社会情勢がいかに変化しようとも、小説が第一義的に作家の個我的表現である限り、自己展開の主題は作家にとって永遠のテーマであるのだろう。（川本274-75 英語表記等省略筆者）

川本によれば、2つの大戦を背景に価値の変動・多様化をみた時代的コンテクストにおいて教養小説が表象する人間形成すなわち精神成長による近代的主体の確立の意味と形態は不変ではありえないしジョイス以降における自己確立の軌跡を追うことも興味ある課題であるとしても、巨視的観点に立つならば、『若き日の芸術家の肖像』においてジョイスが定着させた芸術家像は、その後のさまざまな変身や変容にもかかわらず、その基本的特質を変えていない、ということになる。

つまりは、「英文学」の特質を提示するあるいは教えたり学んだりするには、19世紀の教養小説の系譜をモダニズムの芸術家小説にまでたどることで十分だ、というのが、米国のハーバート大学の大学院に留学してそうした歴史あるいは地政学的コンテクストを含む研究・教育空間において先行研究を学んだうえで提示された川本の教養小説論を支える前提あるいは口実（pretext）ということになる。

思えば、本書の主題を胸にあなたためはじめてから、丁度10年の歳月がたつ。そもそものきっかけは、1962年の秋からハーヴァード大学大学院に学んだ1年間、J・H・バックレー教授のヴィクトリア朝文学に関するインスパイアリングな講義に接したことだったろう。私の中にひそんでいた19世紀文学への関心は、ハーヴァードの知的刺戟によって本格的に目覚めさせられたのである。（川本278）

『イギリス教養小説の系譜』を産み出す引き金となったのはディケンズとの出会いであり、川本の仕事は、『デイヴィッド・カップフィールド』を1850年ごろを境とする社会小説から教養小説への移行過程に位置付けることから始まったと、川本自身は述べているが（川本279）、旧来の「英文学」の研究・教育ならびに英国教養小説論の代表とみなされるこの研究書の主題の歴史的可能性の条件となったのは、ハーヴァード大学大学院において受けたバックレーによるヴィクトリア朝文学の講義にあった。川本とディケンズという異文化の他者と

の出会いあるいは遭遇は、それ自体、ハーヴァードへのトランスパシフィックな移動をつうじてアクセスできた米国の教育空間における19世紀の「英文学」への彼女の「目覚め」つまり精神成長の重要な契機となる文学的かつ道徳的目覚めによって、あらかじめすでに、(重層)決定されていた、ということもできる。

さて、成長をめぐり2つの異なる研究・教育の領域の間で相互に規定しあいながら両者のうちに齟齬をかかえたままであることを確認し、また、川本の英国教養小説論が「英文学」に関わることでありながら英国ではなく冷戦期の米国の研究・教育空間にこそそれが誕生する「起源」あるいはさまざまな始まりのひとつがあったことを確認した今、英国のナショナルな文学の特質を論じている『イギリス教養小説の系譜』というテキストを、米国の冷戦イデオロギーによって歴史化する作業を、そろそろ本格的に進めることができる。

バックレーは英国19世紀の代表的詩人アルフレッド・テニソンをはじめヴィクトリア朝の文学研究一般の代表的な研究者であり、進歩や成長を研究主題としていることはよく知られている。バックレーによる教養小説研究も、その教えをハーヴァードで受けた川本の教養小説論とともに、このような観点で捉えることはもちろん可能だ。しかし、バックレー自身はカナダのトロントに生まれ育っており、のちに米国のウィスコンシン大学やコロンビア大学に移り、そして、ハーヴァード大学の英文科においてダグラス・ブッシュに迎え入れられることになる。そこで教えを受けて教養小説研究を逆に社会小説研究に廻行した研究者がパトリック・ブランドリンガーであり、彼の初期の仕事(Patrick Brantlinger, *The Spirit of Reform: British Literature and Politics, 1832-1867*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1977.)は、川本のそれとは別のかたちで、バックレーの「英文学」研究を継承し転回させたものだった。ところで、バックレー自身の高等教育あるいは文学研究に関するアカデミックな修業はどのようなものだったのだろうか。「英文学」・英国教養小説の特質とされる成長を特権的な研究主題としたバックレーの研究は、20世紀の米国あるいは資本主義世界のどのような歴史的コンテクストにおいて生産されたものだったのだろうか。冷戦期米国の「英文学」の研究・教育における「ニュー・クリティシズム以降」の契機を画したノースロップ・フライ『批評の解剖』については本論の冒頭ですでに言及したが、実のところトロント大学ヴィクトリア・カレッジで学士号を受けたときに指導教授のひとりとしてついたのがフライその人であった。

これを裏返して言うならば、次のように捉え直すことにより、旧来の英国教養小説論を米国の冷戦イデオロギーによって歴史化することができるだろう。川本の仕事を規定していたのは、冷戦期米国で「制度化されたモダニズム」つまり「モダニズムのイデオロギー」に基づく文学解釈が発明されたのちに、⁷それをさらに継承・更新するような「英文学」を含む文学・文化研究の空間だった、と。米国の冷戦イデオロギーに重層決定されたそうした更新とは、1957年に出版され第2次大戦後に支配的な文学研究・批評の言説となった新批評の終焉をしるしづけるといわれるフライ『批評の解剖』とそれ以降のフランク・カーモードやM・H・エイブラムズなどのロマン派の詩をあらためて再評価する研究動向にほかならない。さまざまなイデオロギー闘争に関わる政治・経済はもちろんのこと社会的なものから切り離され独立した文学言語の自律性の主張、とりわけ、モダニズム小説にみられる詩的言語の純粋性の特権化を前提としたうえで、あらためて、19世紀あるいはヴィクトリア朝英国の小説の特徴を掘り起し、「制度化されたモダニズム」に沿ったかたちで「英文学」の歴史とりわけ教養小説の系譜を作成・形成しようとしたのが、『イギリス教養小説の系譜』だったのではないか。「アメリカの影」に文化的・地政学的に規定された日本の「英文学」について述べた際にすでに本論が言及したことが、「教養」・「文化」についてマシュー・アーノルドを継承するフライが自らの文学批評を中心として社会的編制・歴史的形成しようとしたのは、自由でありかつまた解放の力を付与するという意味でリベラルな教育空間にほかならなかった。なるほどたしかに、『批評の解剖』の結論は、「自由な、階級の無い、洗練された社会を構想する能力を与える」文学の研究・教育を志向するものであるが、解放された人間の文化共同体に向けた「教養教育(liberal education)」の目的は、「倫理的」なもの限定されていたことに注意しなければならない。川本の『大いなる遺産』解釈が階級問題を置換する「道徳的」な価値や意味を問題にしていたのと同じように、「倫理的」な解放(liberation)を主張するフライの文学批評にみられる米国リベラリズムは、個人を超えた共同体を求めるものとして提示されているが、文化だけではなく政治や経済をも包含するような集団性に特徴づけられた別の望ましい世界をラディカルに欲望するものとは異なるものようだ。

4. 現在の教養小説論によるグローバルな英語文学と成長の問題 ——成長物語の歴史をメタ共時的に語り直すために

ここまでのところ、本論は、まず、「英文学」の特質が階級の問題と切り離しがたいこと、その階級関係においてジェントルマンの表象・イメージによって解釈することができることを論じてきた。ジェントルマンを産み出す階層としてのジェントリは、下流あるいは下層階級と階級的に差異化されるだけでなく、中間層として、上流階級への社会流動性・階級上昇の欲望とダイナミズムを歴史的に具現する存在であった。ジェントリは、貴族とともに上流階級＝「地主貴族層」を構成するものであった。そして、このようなジェントルマンの理想化された表象あるいはその地主階級のイデオロギーは、産業革命以降による19世紀という激動の時代においてこそ、疑似封建社会の秩序や身分の階層関係を維持・再生産する機能をはたし続ける意味をもった。「英文学」の特質は、近代国民国家の時空間におけるジェントリという表象、すなわち、孤児のように社会的出自が明確でない存在から都会に出てジェントルマンへと階級の階段を上る成長の物語、そして、地域社会の立派な名士・名望家として「地主貴族層」に合体し取り込まれる物語によって、教えられてきた。と同時に、「英文学」の研究・教育の旧来の範例的なテキストとしての川本静子『イギリス教養小説の系譜』を、旧来のイギリス史研究とともに、批判的読み直しの対象として取り上げ実践したメタコメンタリーは、川本の英国教養小説論の主人公の成長物語と旧来の歴史研究が提示するジェントルマンの表象との間に、解消しきれない齟齬があることを示した。そして、齟齬は、これまでの「英文学」の特質についての研究・教育が、政治的・経済的な歴史を含む総合的なものではなく、きわめて倫理的・道徳的なものであり、そのイデオロギー的に脱政治化された限定的な理解や教えが、実のところ、「アメリカの影」によって規定されていたと解釈できる。言い換えれば、20世紀の第2次大戦後とりわけ冷戦期に顕著だった日本の「英文学」は、米国の冷戦イデオロギーによって歴史化することができる、このことを論じた。別の言い方をすれば、川本の英国教養小説論は、モダニズム小説にみられる詩的言語の純粹性の特権化を前提としたうえで、あらためて、19世紀あるいはヴィクトリア朝英国の小説の特徴を掘り起し、「制度化されたモダニズム」に沿ったかたちで「英文学」の歴史とりわけ教養小説の系譜を作成・形成しようとしたものだった。

このような本論のここまでの結論をふまえたうえで、最後に、「英文学」の変容とそのひとつの形式としての英語文学の特質についても論じておきたい。このような議論の拡張をせずに、「英文学」の特質を21世紀の現在からあらためて吟味する作業を終えることはできない。なぜなら、米国の冷戦イデオロギーと21世紀ポスト冷戦後の現在との間に、完全なる切断・変化ではなく、むしろ、歴史的連続性を把握する手続きをふむ必要があるからだ。たしかに、旧来の「英文学」や英国教養小説論は、90年代以降の多文化主義、アイデンティティ・ポリティクス、多様性 (diversity) や「過剰包摂」——これらは液状化する後期近代 (late modernity) と呼ばれるものの徴候でもあるが——の政策、あるいは、それらを受けたり連動したりしたカルチュラル・スタディーズやジェンダー・人種・セクシュアリティ研究をへて、その内容や形式あるいは社会や教育における意味もすっかり変容してしまったように見える。しかし、その一方で、「英文学」およびヨーロッパ文学・その他世界の文学・神話は、あいもかわらずというよりはむしろいっそう、より強度をもちつつ拡張しているともみなすことができるのであり、とりわけ、それらの英語文学が、英語の翻訳をはじめとしてさまざまな文化メディア・テクノロジーもつうじて生産・流通・消費されている状況とその直接・間接の影響がわれわれの教育空間にも見出すことができる。「アメリカの影」あるいは帝国アメリカの文化／政治的拘束とそれからの解放といったかたちで主題化される問いについて応答責任をはたすという意味でも、そしてそれは冷戦期の米国リベラリズムと現在のグローバルに浸透したネオリベラリズムへの対応をさまざまに思考し想像するという意味でも、さまざまに変容しながら現在も存続する「英文学」としての英語文学あるいはそれを部分として含むイングリッシュ・スタディーズについても、批判的吟味を試みる必要があるのだ。それは、グローバルにそしてまた拡大・転回し続けるトランスパシフィックな空間においても存在する可視／不可視の「アメリカ」なるものとそうした存在が重層決定する地政学的無意識との関係について認識見取り図によってアプローチすることになるだろう。

その予備作業として、しかしながら、「英文学」の特質を19世紀以降の教養小説を範例として理解すること自体も、再検討する必要があるかもしれない。そしてまた、ジェントルマンあるいはジェントリと英国の近代

あるいは近代国民国家の形成との関係についても見直す必要があるだろう。そもそも、なぜ「英文学」といえば教養小説だったのか、あるいは、近代小説の起源をめぐる熱のこもった議論がなぜかつては行われたのか。ロストウの近代化論も前提にしていたようにみえるのだが、英国は世界に先駆けて近代化した国であった、それは、いちちやく「ピューリタン革命」という市民革命を経験しその後「産業革命」を起こし、結果として、議会制民主主義とともに、製造業を基盤にした「世界の工場」となった、といった一般的な理解が受け入れられていたからだろうか。つまり、英国の近代化をマネーとの関係からみるならば、なによりも製造業に投資される産業資本とその経済こそが重要であり、だからこそ、それまでの伝統的支配層であった「地主貴族層」と産業資本家との階級関係に関わるジェントルマンのさまざまな表象が重要だった、ということか。

別の言い方をすれば、シェイクスピアという特別に評価される存在があり実際英国のナショナル・アイデンティティの表象・イメージすなわち「イングリッシュネス」といえばそのようにイメージされる代表例のひとつであるにもかかわらず、いったいなにゆえに英国の演劇あるいは劇場文化によって「英文学」の特質を考えることが支配的なものにならなかったのか、ということでもある。17世紀ヨーロッパ全土を舞台に拡がった30年戦争を歴史的コンテクストとして、シェイクスピアの歴史劇つまり英国史劇のロマンス劇への変容を『冬物語』や『テンペスト』が表象する移動するユートピア空間としての宮廷という観点から読み直した大谷伴子『マーガレット・オブ・ヨークの「世紀の結婚」——英国史劇とブルゴーニュ公国』は、英国という国家の近代化の起源をアントワープから撤退した英国の「同胞集団」との同盟に注目することによって、ジェントリの問題を解釈している。ペリー・アンダーソンに加えて、フェルナン・ブローデルの歴史研究やその研究をさらに継承・発展させたジョヴァンニ・アリギの仕事をふまえながら、テューダー朝のエリザベス女王が英国の王権を引き継いだときのナショナルおよびグローバルな政治的・経済的状况と特異な階層として台頭したジェントリの歴史的意味を次のように論じている。「エリザベス女王が受け継ぐことになったのは、英国の王権を維持するために、絶えず資本家やその他のジェントリの経済的・政治的利害と交渉し駆け引きをせざるをえない状況であった」(大谷157)。1540年代、父親ヘンリー8世は、フランスやスコットランドとの戦争資金を捻出するために、貸し付けの強制と大幅な通貨悪铸とを実施した。貸し付けを強制したことで、ヘンリー8世は資本家やロンドン市民を、政治的に、敵にまわすことになり、銀の含有量を大きく減らされた悪貨の鑄造は貿易の混乱と織物生産の急激な低下をもたらした。すなわち、国内の政治的不安定と当時の国際経済の中心的市場アントワープにおける英国の為替相場の急落という経済的混乱、これら2つが相互に増強しあった結果、英国王ヘンリー8世はカトリック修道院からかつて獲得した農地の多くを民間人で安い価格で譲渡せざるをえなくなった。この譲渡の受益者となったのが、ジェントリにほかならず、彼らはその勢力を劇的に増大させた。

このようなジェントリの勃興が英国国家の近代化やグローバルな金融資本との関係とどのようなつながりがあるのか。政治的・経済的問題の対応に迫られた1550年代のエリザベスの王室は、財政改革、すなわち、トマス・グreshamによる王室財政見直しと金融安定化計画を行う。マーチャント・アドヴェンチャラズから毛織物交易で得た収益の大半をアントワープにいるグreshamが外貨で受け取り、それをロンドンでアントワープよりも有利な固定為替レートでポンドに交換して彼らに支払うという仕組みがつけられ、このシステムのおかげで、国際市場における英国通貨の価値を高めることになった。すなわち、ポンドの安定化。これは、ヨーロッパの貨幣・貿易システムを支配・運営するジェノヴァ商人とスペイン国家の超国家的連合体によって、英国のマネーとパワーに課された諸制約から抜け出す試みだった。次に、アントワープに対抗するためのロンドンのシティでの王立取引所の設立。そして重要なことは、ポンドの安定化と王立取引所の設立は、エリザベス女王の財政顧問グreshamが提言した新しい種類の同盟の誕生を告げるものであったことだ。その新しい特異な同盟とは、アントワープから撤退した英国の「同胞集団 (nation)」と英国国家 (state) との間の同盟であり、市民のマネーと宮廷のパワーから構成される「真にナショナルなブロック (a truly national bloc)」は、「高等金融におけるナショナリズムの始まり (the beginning of nationalism in high finance)」を押しづけるものであった(大谷159)。こうして、大谷によれば、英国の近代化はなによりも市民のマネー＝グローバルな金融資本と宮廷のパワー＝ナショナルな国家が英国国内のロンドンにおいて特異な結びつきをともなうブロックを形成したことにあり、ほかに他国では類を見ない社会流動性を担うジェントルマンを供給することになるジェントリはこの同盟形成の過程において生まれた副産物であったことになる。

言い換えれば、「英文学」の特質は、なによりもまず、ディケンズの教養小説の登場ではなく、シェイクス

ピアの歴史劇の登場によって論じられなければならない、ということかもしれない。かつてノースロップ・フライは『批評の解剖』においてヨーロッパの文学において真正な悲劇と呼べるものは、古代のギリシアを除けば、17世紀の英国とフランスにしか見出すことができないと述べたことがあった。すなわち、30年戦争が闘われた17世紀に生産されたシェイクスピアやラシーヌの悲劇の展開・成長した時代は、貴族が急速に実質的な権力を失いつつも強大なイデオロギー的支配力を保持し続けていた期間にあたるのが、示唆された(Frye 37)。「封建制の残余」というようなものは、戦後の日本だけでなく、17世紀のヨーロッパとりわけ英仏両国にもみられたことであったことになる。では英国とフランスの違い、とりわけ演劇から転回する文学・文化の展開・成長の差異性はどこにあったのか。英国史劇こそ、つまり、自国の近い過去の歴史ではなく古代ヨーロッパの舞台やキャラクターを宮廷や貴族の前で再生産するフランスの演劇とは違い、フランスの1貴族に支配された英国が百年戦争・薔薇戦争を経験してテューダー朝を創始するヘンリー7世とエリザベスの生誕を予示する構造をもつ、いわば、ほとんど現代史あるいは上演時の初期近代英国の現在に直結する上演こそ、英国の差異性と特異性を刻印するものにほかならない。さらに話は、演劇のジャンルにとどまらない。このような英国史劇と近代化の関係は、さらに、18世紀末から19世紀の初めの英国における近代国民国家の形成において、再度別のかたちで、反復されることになる。ここで私が言及しようとしているのは、もちろん、スコットランド出身のウォルター・スコットの歴史小説『ウェイヴァリー』をはじめとする小説群のことである。当時のマネーとパワーを握る覇権国オランダともさまざまな交流・交通があったスコットランド内部の地域対立が、前近代的封建社会と近代的資本主義社会との共存・対立および異なる諸生産様式の移行の物語を表象すると同時に、最終的に、それと連動するイングランドとスコットランドとの対立が両者のイデオロギー的・想像的あるいは政治的・文化的交渉を通じて和解と統一にいたるパターンは、ほぼ同じ時期に英国に統合されるアイルランドを含め、「ブリティッシュネス」の神話・物語のモデルともなるものであった。蛇足ながら、英国に特有な社会小説や教養小説とは別に、フランスのバルザック以降の近代リアリズム小説の発展やこれまたバルザックからロシアのトルストイ、さらには、南米の作家たちへ変容・拡張する歴史小説の歴史、あるいは、現代のストーリーミング等のテクノロジーを通じて各家庭に配給される有料でハイ・クオリティTVプログラムであるコスチューム・ドラマへのグローバルな転回があること(たとえば、『ブーリン家の姉妹』やヒラリー・マンテル原作の『ウルフ・ホール』あるいは『ダウントン・アビー』等々例を挙げだしたらきりが無い)も付け加えておこうか。そしてこのような歴史的過程における歴史劇や歴史小説の継承と変容をふまえながら、あらためて、英国史劇によって「英文学」の特質を再考しなければならないのではないのか。

さらにまた、演劇文化と「英文学」から変容する英語文学との関係については、同じ大谷の研究『秘密のラティガン——戦後英国演劇のなかのトランス・メディア空間』が、第2次大戦後の階級の問題とハイ・カルチャー/ポピュラー・カルチャーをめぐる議論について、国境をはじめさまざまな境界・ジャンルを横断するメディア文化とその支配的な流通経路を握る米国に注目しながら、論じている。詳しくここで紹介する余裕はないが、本論との関連で2点だけポイントを指摘しておきたい。第1に、1956年のジョン・オズボーン『怒りをこめてふりかえれ』の衝撃によって、つまり、労働者階級を代表する演劇作家たちの登場によってそれまでのロンドン、ウェスト・エンドの興行を占有していた中・上流階級とその客間劇との間に生じたとされる切断によって、これまで論じられてきたナショナルな英国演劇の歴史と研究・教育を、「秘密のラティガン」を読み直すことによりグローバルなトランス・メディア空間に開き、文学・文化ならびに政治・経済・テクノロジーを総合的に解釈する可能性を実践してみせたこと。第2に、米ソの冷戦構造とイデオロギーを、米国中心でも逆にソ連中心でもなく、英国のソ連との地政学的対立に注目することで、英米のトランスアトランティックな関係と同時に旧ユーゴスラヴィアのような東ヨーロッパ地域の歴史的意味を、英国の演劇文化の表象において探ることを試みていること。これを応用するならば、日米のトランスパシフィックな関係についても、同様の試みを想像することが可能になるかもしれない。とりわけ、米国の冷戦イデオロギーを脱中心化した上であらためてグローバルに再考する際に、アジア冷戦や日本冷戦といった観点から、英国ならびに米国の文学あるいは政治文化を読み直し、帝国アメリカが重層決定する地政学的無意識あるいはアメリカ主導のグローバリゼーションやネオリベラリズムに特徴づけられる現在の資本主義世界の内なる「外部」を志向する「ユートピアと呼ばれる大文字の欲望」の可能性を探ってみることができるとも思われる。

さてこれでようやく、現在の教養小説論によるグローバルな英語文学と成長の問題について、ごく短くでは

あるが、議論を始めることができるかもしれない。英語文学の特質ならびにそれを含む新たなイングリッシュ・スタディーズを、これまで社会的編制・歴史的形成されたリベラル・エデュケーションという教育空間の変容において考察するためにも、ここでは、現代グローバル資本主義世界における成長の問題を、1948年に国連で採択された世界人権宣言のレトリックを分析・解釈することにより考察したジョゼフ・R・スローターの研究ならびにそこで例示されている物語を取り上げたい。⁸ 一読してあきらかなように、旧来の教養小説の存続と第3世界文学やポストコロニアリズム小説への変容こそが、スローターがその考察の対象として選択したものであるが、その研究においては、新たに変容した教養小説における成長の物語つまり人間性を平等に認められた人間存在に到達するプロットが、なによりも各個人の教育的あるいは教訓的物語として解釈されるのであり、その場合の個人は、単に受動的に社会化つまり社会の規範にそって主体化されるだけでなく、自分ですでに知っていると思定されるものを気づきや再認のステップを踏みながら能動的に学ぶいわばアクティヴ・ラーニングを実践するものとされる (Slaughter 3)。言い換えれば、東西冷戦下での政治的コンセンサスを背景に、旧植民地の作家たちがローカルあるいはナショナルな母語というよりはグローバルに流通する英語を使用して生産した文学的成長の物語と平等主義を基底としているはずの人権にかかわる国際法の表象との間の緊張関係だけが主題化され問題となっているわけではない。第1世界/第3世界の階層関係を大人/子ども、教師/生徒といった一方向の知識・教育のコミュニケーションに修辭的に拡張したモデルを、いわば抵抗をへたうえで転倒しようとするきわめてリベラルな身振りや動きにスローターは注目している、とみなすことができるだろう。

スローター自身が結論部というよりは「付録 (Codicil)」において最終的に取り上げているのは、アフガニスタンのカーブル出身の作家カレード・ホッセイニ『君のためなら千回でも』である (原作は、Khaled Hosseini, *The Kite Runner*. New York: Riverhead, 2003, また、2006年、佐藤耕士による最初の邦訳が早川書房から出ており、2007年には、マーク・フォスターが監督して米国で映画としても制作されている)。ソ連のアフガン侵攻とその歴史的激動を背景に、世代を超えて遅延された語り手・主人公アミール (パシュトゥーン人) と召使いの息子のハッサン (マイノリティのハザーラ人) との間の友愛が、民族的差異を想像的に解消することにより自己と他者との間に平等の人権を有する者同士の絆・普遍的なレヴェルにまで拡張されるはずの兄弟愛 (“a spirit of half brotherhood”) として、米国リベラリズムやその人道主義的介入の肯定的ならびに否定的な価値の両方を含めて、分析され評価されている (Slaughter 320-21)。⁹ アフガニスタンから難民として脱出しサヴァイヴァルをへて米国でベストセラー作家に成長するアミールは、遅まきながらかつて自分が見捨てたハッサン、結局は死亡した彼の代わりにその息子をタリバンの政治的および性的暴力から救出するために故国へ立ち戻ることになるのだが、この主人公が具現するのは、あきらかに階級上昇 (upward mobility) の物語の形式を中央アジアから旧ソ連および米国にまたがるグローバルな空間において反復したものとなっている。

現代資本主義世界のさまざまなレヴェルで進行する、そして、現在の成長や人権の問題に対応するような、このようリベラルなコスモポリタニズムの限界について、スローターは、国際法レジームの現在の制度の不備およびそこから発生する人道主義の欠陥だけではなく、文学的想像力およびその教育が歴史的に抱える限界としてのナショナルな枠組みすなわち研究・教育——“cognitive limitations that make it possible, in the era of a global ‘war on terror,’ to reduce *The Kite Runner* to ‘a story of two childhood friends in Afghanistan’...rather than to consider the places of the writers and their readers themselves within overlapping world systems” (Slaughter 324). ——に求めている。米国リベラリズムのコスモポリタンな想像力およびそれを支えるリテラシーの限界をよりはっきりしたもろさと危険の可能性とともにあらわにしてしまっているのが、第3世界とりわけある特定の時期のアフガニスタンの「人びとの苦境に対するケア」を呼びかける全米国大領ジョージ・W・ブッシュのスピーチかもしれない。

One of the messages I want to say to the people of Afghanistan is it's our country's pleasure and honor to be involved with the future of this country. We like stories of young girls going to school for the first time so they can realize their potential....[T]he people of America have great...regard for human life and human dignity....[W]e care about the plight of people....I'm going to repeat what I said before: We *like stories*, and *expect stories*, of young girls going to school in Afghanistan.

George Bush, “Speech.” Kabul, Afghanistan, 1 March 2006. (下線筆者)

このスピーチに作動している想像力は、自らその教育において学びその可能性を実現するつまり自己実現をするためにはじめて学校に通いたいと望む少女の物語について主題化しているが、このアフガニスタンのカーブルにおいて遂行されたスピーチ・アクトおよびそのテキストにおいては、さまざまな特権や権利の状況が、文学的なテクノロジーや法的資源のそれとともども、公正な(再)配分されているとはいえないことに十分に敏感ではない、とスローターは批判している (Slaughter 324)。

そうした必要性を実際に実現するやり方についての具体的な議論はとりあえずおいて、留保つきではあっても *The Kite Runner* にみられる米国リベラリズムが取り上げられているのは、それと合せ鏡あるいは相補的な例として一緒に論じられる次のようなサウジ・アラビアにおける(新)保守主義とそのグローバルな同盟関係を表象する文学テキストが問題とされているからだ。資本主義世界とその消費文化のレベルでよりグローバルにポピュラーなやり方で、つまり、より一般的にわかりやすく明示的な形式で、米国リベラリズムが21世紀の現在もはらむ冷戦イデオロギーすなわち反共産主義の政治的意味が付与されて、19世紀英国の教養小説のほとんど機械的な反復となっているのが、サウジ・アラビアの教養小説として英語に翻訳されベストセラーとなった小説 *Turki al-Hamad, Adama*. Trans. Robin Bray. Saint Paul, Minn.: Ruminator, 2003 だ。スローターによれば、イラクのサダム・フセインがアメリカ軍によって2003年12月捕えられた直後に、米国の公共ラジオ放送は、早速、この小説を取り上げ、ひとりのとても賢い少年がさまざまな試練をへたのち正しい道を歩んで成長した物語として紹介した。すなわち、彼の正しい教育は、その途中で誤ったマルクス主義者たちの集団に加わりバアス党が掲げるナショナリズム・汎アラブ主義の急進的なヴィジョンを実現すべくサウジ政府を転覆する誤った経験をするが、最終的には、ラディカルな革命ではなく、その代案としての漸進的な進化あるいは米国のライフスタイルに合致する成長の物語として表現される。この物語の目的=結末(end)は、政治学と経済学に関する正規の教育を受けてそこで手にした奨学金で米国または英国へ留学するライフスタイルであるが、そのライフコースの過程で描かれるのは、本来の集団性に特徴づけられる政治的運動への幻滅とそれを補償するような個人の道徳的・性的覚醒による置換となっている (Slaughter 317-20)。たしかに、最初は反抗的だった10代後半の少年がその教育の過程で読むのが、レーニンやナセルあるいはファノンやチェ・ゲバラだけでなく、ディケンズでもあったりして、この英語翻訳されたテキストは、ジェローム・バックレーや川本静子が挙げたほとんどの特徴を備えた、近代西洋の伝統的教養小説となっている。

スローターが主張しようとしているのは、人権についてより望ましいグローバルな想像の共同体の必要性であるが、そこで成長や人権に関わる文学的な表象や物語との関係でその基本的な知の力として想定されているのはなんだったか。“the places of the writers and their readers themselves within overlapping world systems” (Slaughter 324) といういい方で、スローターが分節化しようと試みていたのはなんだったのか。読んだり書いたりする行為を実践するわれわれ人間集団が関係をもちその居場所をみつけたり位置づけられたりする、さまざまな諸世界システムが、ただ共時的にのみ、現実存在しているようにみえる。しかしながら、そうしたさまざまなシステムは、近代資本主義世界の展開・転回という条件のもと、さまざまな選択や対応をしながら、多種多様な異なる時空間によって特徴づけられる世界・社会として、歴史的過程を歩んできた。個別の社会の人びとが、個人的にあるいは集団的に、自らを、それぞれの支配的な生産様式に差異がある異なる諸社会編制体において、それぞれに関係づけ総合的に認知するときに、それらのシステムや編制体が時間や空間の差異をとまなながら重層的に交錯したり折り重なったりしている世界の歴史空間を、新たな歴史物語として捉えることが、要請されていたのではないだろうか。言い換えれば、成長物語の歴史をメタ共時的に語り直すことがきわめて重要なのであり、そのように想像力を豊かに作動させる知の力とそれを育成する教育が大事だということになるだろう。

もう少し理論的に一般化して、成長物語あるいはその研究・教育をめぐる歴史的過程をメタ共時的に語り直すという問題について、論じてみよう。具体的には、たとえば、英語圏文学、旧大英帝国の「英文学」にも遡行することができるようないまの帝国=コモンウェルスの基本的に英語で書かれた文学を、グローバルとローカルの複雑な関係すなわちグローバルな空間におけるさまざまな移動や交流という観点から読解・再読する試みを思い浮かべたいかもしれない。近年、文学・文化研究以外の分野で、20世紀初頭の「進歩」・冷戦期

の「近代化」に代わり、モダニティについての議論が活発になされてきている。そして、現在のグローバル資本主義世界を規定するこのモダニティについて、主として米国の英米文学・文化研究においても、それが、初期近代ヨーロッパという空間配置において単独にしかも特異なかたちで存在したものの、「シンギュラー・モダニティ」とみなすべきか、それとも、地球規模・惑星規模で同時多発的にあるいは時間的・空間的なズレをとれないながらさまざまに出現・転回したものの、「オルタナティヴ・モダニティズ」として捉えるべきか、争点的になっている成長の問題についてそのメタ共時的な語り直しを掲げる試みは、まさにこれら「シンギュラー・モダニティ」と「オルタナティヴ・モダニティズ」との間のアンチノミーとしてあらわれ不毛な議論に終始しがちな問題を、生産的に解決しようとするものである。そして、そうした語り直しによる研究・教育の理論と実践は、まさに、本論が中・長期的なパースペクティブにおいて立ち上げようとする新たな英語文学のユートピア的なプロジェクトにはかならない。¹⁰

最後の最後に、米国のリベラルな日本研究者によって21世紀の初めに日本ならびに米国の読者を中心にグローバルに提示した、成長の問題について、そうしたことがそもそもわれわれに突き付けられていること、および、その問題がどこにあるかということ、提起して本論の議論を終わりたい。冷戦がほぼ世界的に終り21世紀に入ろうという時期に、ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』は、第2次大戦敗戦後の日本のエリート層、戦時中に陸軍に奪取された日本の宮中・経済界・海軍にいたりベラルたちが再び米国による敗戦処理と占領期において復活した支配層が、成長を設計したことを論じている。

具体的なテキストとして、大来佐武郎が個人的に始めその周辺にいた数名とともに立案・作成した報告書、1946年3月に外務省の特別諮問委員会がまとめた「日本経済戦後再建の基本的問題」と題される報告書草案に言及しながら、1930年代の満州への人的・経済的投資によって起こした重化学工業の革命・スキルをもった労働者集団の育成を容れたやり方ではあるが継承・発展させるような、最先端テクノロジーを基盤とする経済というヴィジョンを描いていたことを論じている。端的に言って、それは「経済成長」を「計画」・「設計」するというところにほかならなかった、そして、精神成長でもなければ民主主義の実現を目指すような政治的成長でもない、この「経済成長」こそ、否、この種の文化や政治からは切り離された、そして、軍事・安全保障の問題も棚上げしたような成長の物語こそが、その後の日本の歴史において、政策立案のための長期的青写真にもっとも近いもの——とりわけ、1960年代という東京オリンピック、新幹線敷設、所得倍増計画があらわれる高度経済成長時代に具現したもの——であった（ダワー 353-57, 447注29）。

こうして、ダワーによれば、日本の経済学者や官僚たちが設定したけして瑣末なことであったとはとてもいえない目標「経済成長」は、達成されたのだが、21世紀の現在、日本の戦後システムのうち、当然崩壊すべくして崩壊しつつある部分とともに、「非軍事化と民主主義化という目標」という目標もいまや捨て去られようとしている、という（ダワー 396-97）。こうした契機を捉えて、ダワーにたとえば代理表象されるような米国内リベラリズムは、次のような問いを提示している。

この世代のエリートたちは、後継者たちにひとつの未解決の問いを残したということである。——日本はどうすれば、他国に残虐な破壊をもたらす能力を独力でもつことなく、世界の国々や世界の人々からまじめに言い分を聞いてもらえる国になれるのか？この問いこそ、「憲法9条」が残し、「分離講和」が残し、「日米安保条約」が残したものである。それは軍事占領が終結し、日本が名目的な独立を獲得したときの従属的独立 *subordinate independence* の遺産である。（ダワー 394-95）

こうした問いがダワーのいうように21世紀の現在に生きるわれわれにとって未解決のままであるのは、その歴史的諸起源のひとつが、戦後に息を吹き返したエリート層の思考・想像した「経済成長」の「計画」にあったといえる。「こうして、連合国最高司令官による新植民地主義的な上からの革命という変則的な事態は、両刃の剣となった。それは純粋に進歩的な改革を推進すると同時に、統治の権威主義的な構造を再強化した。…内閣を文民制としてそこに強力な責任能力を与えたが、そうしておいて、司令部自身は内閣の力を去勢するような行動をおこなった。…これは窮屈な民主主義であった。…そのため社会の真の多元化や、市民の社会参加や、行政の説明責任といった理想が促進されるよりもむしろ遅滞し、問題はいつそう複雑化した」（ダワー 391）。すなわち、日米合作の官僚主義崇拜・戦後の平和においても延命した大政翼賛会的な古い体質・象徴

天皇がもつ説明責任回避の機能とともに、「新たに導入された天皇制民主主義のうちの成長不全の部分」(ダワー 391-92)が残存することになった。言い換えれば、戦後の日本は、「経済成長」に関しては、奇跡的にもいふべきやり方で、あるいは、冷戦期の米国にとってほかのアジア諸国の優等生あるいは近代化のモデルといわれるようにまで、成し遂げたのではあるが、政治文化の成長つまり民主主義をアクティヴに学び教育を通じて自らを育成・成長するという点に関しては、機能不全のままに陥っているということになるだろうか。ここで米国リベラリズムによってわれわれに問われている問題・応答責任を政治的というよりは倫理的に求めているように思われる問いは、すでに本論でモダニティをめぐるアンチノミーを論じたときに出会った問いと形式的には同型のものともみなすことができるようなもの、すなわち、経済的成長 Development vs 政治的成長 Democracy というアンチノミーである、このことを指摘して、とりあえず本論を閉じたい、と思う。

* 本研究はJSPS 科研費JP25370273の助成を受けたものです。

Notes

- 1 以下の4つのパラグラフは、部分的に加筆・修正を含んでいるが、基本的に、2015年12月18日付『週刊読書人』における「年末回顧」の書評原稿である大田「グローバリゼーション時代のイギリス文学」に基づいている。
- 2 近年英米を中心に議論されてきた「英文学」・文学研究あるいは英語研究の「危機」・「衰退」の問題を、オーストラリアのような英語圏やヨーロッパさらには中国や東アジアの国々を含むグローバルなコンテキストにおいて、カリキュラムや定員その他をめぐる統計その他の数値・数量的アプローチを用いて、再考することで、イングリッシュ・スタディーズのグローバルな未来を展望したものに、Englishの研究がある。
- 3 川本によれば、教養小説(Bildungsroman)とは、一般的に、ゲーテ『ウィルヘルム・マイスター』を想起させるタームであり、「18世紀ドイツ市民社会において、ギリシア思想の影響のもとに、人間形成(ビルドゥング=Bildungとは元来 Shaping乃至Formationと同義であるが、ここでは、市民としての人間形成を意味する)の理念が生まれ」(川本9)、それを主題としたヘルマン・ヘッセ『デーミアン』やトーマス・マン『魔の山』にいたる作品系列のことを指示する。だが、ドイツ教養小説から独立させて英国の教養小説を論じようとする川本は、ジャン・ジャック・ルソーやパイロニズムなどフランスあるいは汎ヨーロッパ的なロマン主義文学の影響、ならびに、18世紀以来のピカレスク小説の伝統との関連のうちに、教養小説を論じようとした。ここでは、私なりに補足・修正をほどこしてまとめてみよう。19世紀以降の「英文学」の特質をなすジャンルとしての英国の教養小説とは、そのきわめて特異あるいは特殊な(peculiar)社会(ペリー・アンダーソン)が生み出した「地方出の青年」が、経験を通していかに苦しみながら自己成長し、社会の一隅にささやかな居場所を得るにいたったか、すなわち、主人公の精神の成長(Bildungあるいはdevelopment)を主題とした小説として規定されるものである(川本11)。さらに若干、川本が前提としている紳士あるいはジェントルマンと教養小説との関係についての歴史研究について、補足説明を念のためしておくなら、越智武臣『近代英国の起源』京都:ミネルヴァ書房、1966に主として依拠しながら、教養小説の主人公がほとんどの場合ジェントルマンであり、「ジェントルマンとは何か」の問題すなわち英国独自のジェントルマン・イデアール=「英国社会においてその固有な目的価値として措定された文化理念」(越智319)が一貫して問われていると、説明されている。
- 4 政治的・経済的問題ではなく道徳的問題としてジェントルマンの意味が問われることになる要因を、川本自身は、直線的な歴史展開の因果関係によって、一応、説明を試みている。すなわち、20世紀初頭に明白なカタチで立ちあらわれてくる紳士あるいは市民と芸術家との間の分離・対立が、1860年代のこの小説が書かれた時点においてはいまだみられないからだ。しかしながら、そもそもなぜそのような歴史的变化が英国資本主義社会において展開することになったのか、どのような政治的・経済的要因あるいはマテリアルな条件がそのような分離を引き起こして、ジェントルマンや階級関係の変容を、少なくとも教養小説の表象に文化的にもたらすことになったのか、説明されないままである。
- 5 階級問題は、19世紀後半から20世紀にかけて、主としてマネーと性的差異の問題に転位され、想像的あるいはイデオロギー的解決がなされることになる。したがって、英国および資本主義世界の歴史の過程と文学あるいは歴史に関わるさまざまなテキストを歴史化するときに、ひとつは、富とりわけ植民地由来と思われる出所が曖昧にされしばしば遺産というカタチで贈与者から主人公に与えられるもの、そしてまた、さらに触知するのが困難な金融資本、これら2種類のマネーの表象を単純反映論的ではなく歴史に結びつけるリーディングを試みる必要がある。もうひとつの性的差異の表

象についていうならば以下のことを示唆できるかもしれない。デイヴィドにとってのアグネスは、川本の指摘によれば、試練に耐えた19世紀英国教養小説の主人公に報酬として与えられる理想の女性、つまりは、母性と家庭のイメージによって常に包まれた良妻賢母の女性像にほかならないのだが、あきらかにこうした女性の理想像を生産しその存在を肯定的に価値評価することができるのは、そのための特定の歴史的可能性の条件があるはずだ。そしてその条件とは、20世紀半ばの冷戦期の資本主義世界において米国が主導したフォーディズム生産体制・完全雇用・消費文化というシステムあるいは福祉国家にほかならないこと、そして福祉国家における近代的主体を再生産するイデオロギー装置が階級的な集団性から切り離され孤独な日々の生活を送ることになる個人=労働者と国家・官僚組織を媒介する核家族・性的再生産の機能を担う「ホーム」であることは理解するのにむずかしいことではないだろう。ここで主張したい論点は次のことだ。それは、20世紀の冷戦期日本の「英文学」における文化ヘゲモニーとして存在した「アメリカの影」を、「英文学」の特質を決定的に規定するような良妻賢母の女性表象に探りあてることにより、旧来の教養小説研究を歴史化する作業を開始することができるかもしれない、ということにほかならない。

- 6 ロストウの近代化論の日本での受容が彼の議論をそのまま受け入れたわけではないことについては辛島219-22を参照のこと。また、国際関係思想史の観点から、社会民主主義の再検討を試みる研究において、ロストウの近代化論の米国および日本におけるリベラルあるいは保守の政治的・イデオロギー的立場の錯綜した関係を簡潔にまとめさらなる議論・研究へとマッピングしたものに酒井がある。
- 7 「制度化されたモダニズム」や「モダニズムのイデオロギー」については、大田「ベケット、ナボコフ、そして文化冷戦」ならびに「誰もエドワード・サイードを読まない？」を参照のこと。モダニズムのイデオロギーや文化冷戦と川本の英国教養小説論との密接な関係は、実のところ、『イギリス教養小説の系譜』序論第1節「教養小説とは何か」の冒頭をみるだけで、あきらかである。そこではLionel Trilling, “The Princess Casamassima.” (1948) *The Liberal Imagination* (1949) 所収からの引用と説明がなされている(川本7-8)。ヘンリー・ジェイズ『カサマシマ公爵夫人』を論じたニューヨーク知識人の代表ライオネル・トリリングは、ジェイズの文学作品が、アナキスト小説すなわち資本主義社会を批判する政治的な文学あるいは社会学的な内容に満ちたテキストなどではなく、複雑で有機的な美的形式を備えたモダニズム的な自律言語によって十分評価しうる文学作品であり、あまつさえ、ヨーロッパの教養小説の系譜に位置付けることができることを主張している。2つの拙論でも論じたように、この論文は、ジェイズかセオドア・ドライサーか、すなわち、モダニズムか社会主義リアリズムかという二項対立を立てたうえで前者に価値付与してその系譜からなるその文学史を創設する冷戦イデオログとしてのトリリングのプロジェクトにほかならなかった。
- 8 現在の教養小説に関するスローターの議論の概略については、すでに、市川が近年新たに提出されたほかの2冊の教養小説論とともに、日本ヴァージニア・ウルフ協会の学会誌において、書評として紹介している。本論のスローターのまとめも、一部この紹介に負うところがある。
- 9 「世界市民 (World Citizens)」として生徒・学生を育成し成長を促す Young Adult Literature としての *The Kite Runner* についてはBeanほかを参照。

また、20世紀末の英国小説における画期的な事件と呼ばれるサルマン・ラシュディ『真夜中の子供たち』、英語圏小説という枠組みにおさまりきらない、そしてまた、コモンウェルス文学を公然と否定するような、コスモポリタニズム、ハイブリディティ、世界文学、あるいは、マジック・リアリズムの巧妙な使用・応用によってポストモダニズムとポストコロニアリズムを奇跡的に融合させたとされるテキストについても、現在の教養小説やグローバルな英語文学という観点から論じるべきだったかもしれないが、これについては別の機会にゆずりたい。こうした議論の出発点のひとつとなるのは、旧ソ連あるいはアフリカや南米といった第3世界における教養小説のグローバルな転回を視野に入れながら、『真夜中の子供たち』を論じたJuragaの研究だろう。そしてまた忘れてならないポイントとして、次のことがある。ポスト冷戦期にラシュディが生産したこの小説テキストが、実のところ、たとえば、インディラ・ガンディーの表象の場合のように、ひそかに冷戦イデオロギーのきわめて陳腐なレトリックを使用していること、すなわち、一見非政治的できわめて美学的なその文学言語があいかわらずの反共産主義という政治的意味内容を発信している可能性について、批判的に、読み直しを開始したのがBookerであった。

- 10 後者の側から議論を提示しているように思われるものに、九篇の論考からなる論集『土着と近代——グローバルの大洋を行く英語圏文学』がある。実際、編者のひとりでもある木村茂雄は、「おわりに」において、「グローバル化の同質化の理法」・「一面的」で「人間不在の悪しきグローバル化」を是正するためにも、「国際化やグローバル化の明証性に対して、より可視化しにくく理論化しにくい土着性の意味を、文学や文化の観点から突き詰めていくことの重要性」を主張してい

る。また、木村は、第2章において、たとえば、ゼロ年代の移民小説2つとガヤトリ・スピヴァク『グローバリゼーション時代における美的教育』を解釈しながら、以下のように議論を結んでいる。「最後にもう一度述べるなら『土着と近代』、『ローカルとグローバル』、これらの対立軸を崩すことはできず、また崩すべきでもないだろうが、少なくとも現代世界の状況を踏まえるなら、その二者択一に陥ることは避けるべきだろう。土着と近代にしても、さまざまな土着、さまざまな近代があり、それらが時代や場所に応じて、また、相互に作用と反作用を繰り返しながら、構築・再構築されていると見た方が現実的ではないだろうか」（木村80）。論集全体の概略は、どのようなものか、一応、確認しておこう。具体的には、梅正行の「はじめに 遍在する土着、遍在する近代」がわかりやすく親切に予告していたように、インド、パキスタン、アフリカ、英国、カリブ、オセアニア、そして日本と移動しながら、モダニティやグローバリティだけでなく移動したり変容したりしながらも新たな共同体を創出していくためのリソースともなりうる土着性を、21世紀の人文文学・文学研究の可能性としての「遠い他者を読む想像力のトレーニング」を実践しつつ、探っている（梅3-14）。こうして、まず、植民者の言葉＝英語によって書き換えられた「インド」の土着性・近代化表象（第1章）が、さらに、インド・パキスタンだけでなくアフリカにも議論が繋がれ、ケニア人作家グギ・ワ・ジオンゴにより「西洋近代」によって破壊・断片化された土着文化の全体性を「人間回復」とともに主体的に再統合するために再発明した新たな口承文学「オラチュア」（第3章）が、また、福祉国家期においてネオリベリズムの勃興的な先取りを提示しているかにも読める第4章におけるシエラレオネの「私設警察」、近代を空洞化するスパイとゴシップのネットワークの土着性が、論じられる。続く第5章から第7章では、「カリビアン・ディアスポラ」オリーブ・シニアの視線が眺めるジャマイカの村社会にやってきたインド系女性・英国の都市へ向かうアフリカ系少年のトランスナショナルな移動の軌跡が、また、ジャマイカ・キンケイドの文学テキストとそのサブテキストであるドキュメンタリー映画が可視化するカリブ海地域における「持続可能」な「開発」としてのツーリズムという新たな土着主義こそがネオリベリズム・新植民地主義の搾取を引き起こしている「真実」が、そして、トリニダード・トバコ出身にしてインド人年季契約労働者の末裔でもあるV・S・ナイポールの文学、なかでも『到達の謎』に探った空間的・地理的のみならず具体／抽象のリアリティに関わる土着と近代の間のさまざまな移動が、それぞれに、議論される。ここには、英語圏文学のガイドブックとして読めるよう、心配りがみられる。しかしながら、この時点で英語圏文学という概念をめぐる問題のありかを示唆するようなコメントにぶつかる。「最後に南北アメリカ大陸の西、太平洋がのこった」と述べる梅によれば、この地域の文学は日本の目の前のことでありながらほとんど語られてこなかった、という。ひょっとしたら、ここに英語圏文学という研究パラダイムとその不満が孕まれているかもしれない。あるいは、英語圏文学と旧来の「英文学」を現代のグローバリゼーションに対応して発明しようとした世界文学や英語文学といったものとの間の齟齬や亀裂の徴候といってもいいかもしれない。オセアニアの舞台芸術家レミ・ポニファシオの惑星的・越境的想像力を探った第8章と『東京物語』・『ゴジラ』を表／裏・昼／夜として併置することで戦後日本における近代の土着化のジレンマを考察した第9章は、この大洋空間を規定した超大国あるいは帝国アメリカの影あるいは存在を、提示しているようにみえる。すなわち、「イギリス連邦占領軍ニュージーランド軍の一員」でもあったマオリの詩人を広島で原爆投下後の回収作業にそもそも向かわせることになった原爆投下——その後の核実験と廃棄物の処理・除染につながる？——をし、かつ、近代日本の歴史をその「近代化」の政策により大きく規定した米国。このように、（日本を含む）米国というその居場所を配置するのが困難な存在は、英語圏文学の解釈における不満を引き起こす。と同時に、こうした不満は、グローバリゼーションやオルタナティブ・モダニティズを旧大英帝国といった枠組みとは別のかたちで、新たな英語文学・英語研究の思考・想像力への欲望を産み出しもする。

なお、この注を付けた本文のパラグラフ、ならびに、上記のこの注の内容は、2015年11月20日付『週刊読書人』に掲載した『土着と近代——グローバルの大洋を行く英語圏文学』についての書評「英語圏文学とその不満？」を加筆・訂正したものであることをことわっておきたい。

Works Cited

- Anderson, Perry. "Origins of the Present Crisis." *New Left Review* 23 (1964): 26-53.
- Bean, Thomas W., Judith Dunkerly-Bean, and Helen J. Harper. *Teaching Young Adult Literature: Developing Students as World Citizens*. Los Angeles: Sage, 2014.
- Booker, M. Keith. "Midnight's Children, History, and Complexity: Reading Rushdie after the Cold War." *Critical Essays on Salman Rushdie*. Ed. M. Keith Booker. New York: G. K. Hall, 1997. 283-313.

- Buckley, Jerome Hamilton. *Season of Youth: The Bildungsroman from Dickens to Golding*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1974.
- Colley, Linda. *Britons: Forging the Nation 1707-1837*. London: Pimlico, 1992.
- Conrad, Sebastian. “‘The Colonial Ties Are Liquidated’: Modernization Theory, Post-War Japan and the Global Cold War.” *Past and Present* 216 (2012): 181-214.
- English, James F. *The Global Future of English Studies*. Oxford: Wiley-Blackwell, 2012.
- Frye, Northrop. *Anatomy of Criticism: Four Essays*. Princeton: Princeton UP, 1957.
- Juraga, Dubravka. “‘The Mirror of Us All’: *Midnight’s Children* and the Twentieth-Century Bildungsroman.” *Critical Essays on Salman Rushdie*. Ed. M. Keith Booker. New York: G. K. Hall, 1997. 169-87.
- Slaughter, Joseph R. *Human Rights, Inc.: The World Novel, Narrative Form, and International Law*. New York: Fordham UP, 2007.
- 青山吉信・今井宏・越智武臣・松浦高嶺編著『イギリス史研究入門』東京：山川出版社，1973.
- 市川昭子「Joseph R. Slaughter, *Human Rights, Inc.: The World Novel, Narrative Form, and International Law*. (Fordham UP, 2007) ほか書評」『ヴァージニア・ウルフ研究』30 (2013) : 95-98.
- 大田信良「英語圏文学とその不満？——新たな英語文学・英語研究の思考・想像力へ」書評『土着と近代——グローバルの大洋を行く英語圏文学』榎正行・木村茂雄・武井暁子編著 東京：音羽書房鶴見書店，2015. 『週刊読書人』2015年11月20日：5.
- 「グローバリゼーション時代のイギリス文学——『理論』とある批評家の『無邪気な外遊』」『2015年回顧——動向収獲』『週刊読書人』2015年12月18日：5.
- 「誰もエドワード・サイードを読まない？——批評理論と冷戦期のアメリカ文学」『冷戦とアメリカ——覇権国家の文化装置』村上東編 京都：臨川書店，2014. 335-68.
- 「ベケット， ナボコフ， そして文化冷戦——『モダニズム文学』の制度化」『愛と戦いのイギリス文化史 1951-2010年』川端康雄・大貫隆史・河野真太郎・佐藤元状・秦邦生編 東京：慶應義塾大学出版会，2011. 319-333
- 大谷伴子『秘密のラティガン——戦後英国演劇のなかのトランス・メディア空間』東京：春風社，2015.
- 『マーガレット・オブ・ヨークの「世紀の結婚」——英国史劇とブルゴーニュ公国』東京：春風社，2014.
- 辛島理人『帝国日本のアジア研究——総力戦体制・経済リアリズム・民主社会主義』東京：明石書店，2015.
- 川本静子『イギリス教養小説の系譜——「紳士」から「芸術家」へ』東京：研究社，1973.
- キンモンス， E・H『立身出世の社会史——サムライからサラリーマンへ』広田照幸ほか訳 東京：玉川大学出版部，1995.
- 酒井哲哉「社会民主主義は国境を越えるか？——国際関係思想史における社会民主主義再校」『思想』1020 (2009) : 133-249.
- ダワー， ジョン『増補版 敗北を抱きしめて』三浦陽一ほか訳 東京：岩波書店，2004.
- ブリッグズ， エイザ『イングランド社会史』今井宏ほか訳 東京：筑摩書房，2004.
- 村岡健次・川北稔編著『イギリス近代史』京都：ミネルヴァ書房，2003.